



頭文字D 涼介×拓海

真夏の夜の夢



★AzureWhale+BOSS-PAN★

The first anniversary memory book

2007.07.10

☆☆☆のつけからパ口ってみました☆☆☆



こんにちは。本では初めまして。
BOSS-PANのなんやです。
この度はこの本を手にとっていただきありがとうございます。

「真夏の夜の夢」というお話は、お互いの一周年記念企画と言うことで、リレー小説形式でブログ連載していたものです。

それを今回、加筆修正し本と言う形をとることになりました。

AzureWhale のくじらさんと私の愛の結晶…皆様に楽しんで貰えたならこの上ない幸せです。

ちなみにですが、この本は拓海(♀)設定となっておりますのでご了承下さいませ。

嬉し恥ずかしの初本でございます。
拙いところも多々ありますが、最後までお読みいただけたら嬉しく思います。

なんや
2007. 7

- * 第一夜…なんや
- * 第二夜…くじら
- * 第三夜…くじら
- * 第四夜…なんや
- * 第五夜…なんや
- * 第六夜…くじら
- * 第七夜…なんや
- * 第八夜…くじら
- * 第九夜…なんや
- * 第十夜…くじら
- * 第十一夜…なんや
- * 最終夜…くじら

- * 番外・夜話…なんや
- * 4コマ…なんや

～第一夜～

——見た瞬間に心臓が止まるかと思った。

暗い夜。車のヘッドライトが氾濫する光の中であの人を見た。

排気ガスの臭いが鼻に付き、苦手ではないけれどその濃さに、幼馴染の言葉に頷き峠にまでやって来た自分を後悔し始めていた。

一人、彼らから離れ、新鮮な空気を吸い込んでいると、突然の爆音とともに車の集団がやって来たのだ。

その中の一際目立つ二台の車。

そこから降り立つ人の姿を見た瞬間、拓海は目を見開き、呆然と固まったまま動けなくなった。

ぼんやりとした照明の中でもはっきりと分かる、あの姿。そして独特な雰囲気。

あの時と同じ、白い車に乗り、あの頃よりもさらに大人びた彼の優しく微笑んでくれた顔は、今は厳しく引き締まり、その視線は決して自分を見ない。

固まったまま動かない拓海の横で、幼馴染が色々言っていたような気がするが、拓海は何も聞こえていなかった。

ただ、一年前にたった一度会ったきりの、けれど変わらず心を捉えたままの、遠くになってしまった人を見つめ続けていた。

あれからさらに一年。

好きじゃなかったはずの車を運転することが楽しくなり、自分の車が

ハチロクと呼ばれることも、そして自分が秋名のハチロクと呼ばれるようになって暫く経つ。

彼と一緒にいた弟の車がFDと呼ばれることも、そして彼の乗る車がFCと呼ばれることも知った。

さらに、彼が、赤城の白い彗星と呼ばれ、群馬中の走り屋の賞賛を浴びるカリスマ的な存在だと言ったことを。

そして…。

藤原」

名を呼ばれ、振り返るとあの夜の日。遠かったはずの彼がすぐ傍にいます。

一気に緊張で体が固まり、顔が強張る。

「何でしょう？」

返す言葉も無い。

そんな拓海の様子に、涼介は僅かに眉根を寄せた。

「や…次の遠征先の日程なんだが、藤原の休みは以前貰ったシフト表通りで大丈夫なのか？」

彼が始めた県外遠征のチームの、ダウンヒルドライバーに選ばれ、参加するようになってもう四ヶ月以上が経っている。

だが未だに拓海は涼介に慣れない。

まるで懐かない猫のように距離を置き、近付けば途端に逃げ出す。そしてこうして会話しながらも、拓海が警戒しているのは涼介にも分かっ

てしまっている事だろう。

だが拓海は涼介の前で緊張を解くことが出来ない。

あの夏の日…起こった出来事のために。

たとえ彼がその事を忘れていたとしても。

「はい。大丈夫です」

強張った表情のまま頷く。じつと見つめる涼介の視線がきつくなったような気がしたが、拓海はそれを気のせいだと思った。

自分のことで、この人が何か気に留めるような事はないはずだ。走り
のこと以外で。

「藤原」

「はい？」

まだ何かあるのだろうか？

不思議そうに顔を上げた拓海の目に、厳しい表情で自分を見つめる彼の顔があった。

ドキリ、と拓海の胸が甘くざわめく。

藤原は…他に女の姉妹とか、従姉妹とかいるのか？」

一瞬、何を言われたのだろうかかと不審に思ったが、拓海は首を横に振った。

じつと、探るように見つめてくる涼介の視線が怖い。

「いいえ、俺は一人っ子ですし…従姉妹もいません」

拓海の返事に、涼介は残念そうに視線を落とし溜息を吐いた。

「そうか…変な事を聞いたな。忘れてくれ」

え、あ、…はい」

頷きながら、どこか肩を落とした涼介の背中を見つめる。

いつも自信に満ち溢れたような雰囲気の人が、今日はやけに沈んで見えた。

…どうしたんだろう？疲れてるんだろうか？

そう心配し、その背中をじつと見つめていると、頬にピタリと冷たい感触がした。

「わっ！」

慌てて飛び退ると、そこには冷たいお茶の缶を拓海に押し付ける啓介

の姿があった。

「啓介さん！何するんですか！」

「ほれ。お疲れさん。これは史浩から」

ニヤニヤと悪戯っぽく笑う人物に抗議の声を上げるが、啓介が聞いてくれたことは一度も無い。

不満に唇を尖らせながらも、拓海は素直にその缶を受け取った。

「ありがとうございます」

そして啓介の視線も、項垂れた涼介の背中に移る。

「アニキが気になるのか？」

ドキ、とまた心臓が跳ねたが、他意はないと知り、頷いた。

「はい。何だか、疲れてるみたいだったんで…」

啓介は自分の分の缶のプルトップを引き開けながら、顔をしかめた。彼にして珍しい、苦虫を潰したような顔に、拓海は啓介を見ながら瞬きを繰り返す。

「ああ、気にすんな。アニキは、夏になるとおかしくなるんだ」

「そう、なんですか？」

「ああ。お前、聞かれたか？姉妹はいないか、って」

聞かれましたけど…」

「やつぱそうか。…お前には、いつか聞くとおもうってたんだけど…」

「…お前には？その言葉に拓海は首をかしげる。

「何なんですか、いったい？」

「うん、と唸りながら、啓介は缶に口を付け、咽喉を湿らせながら言

い辛そうに口を開く。

「探してんだよ、お前みたいのを」

俺？」

「ああ、でも男じゃなくて、女な」

女……」

ドキリと心臓が跳ねた。声が震えたが啓介には気付かれなかったようだ。

色素の薄い茶色の髪で茶色の瞳の女。背が高く……170はあるって

言ってたかなあ……そいつ」

……まさか、覚えているはずない。だから違う。拓海は自分に言い聞かせ、おそろおそろ外していた視線を啓介に戻す。

「その人って……涼介さんとは……」

あ……恋人なんだってさ。忘れられないって言ってたから、別れたか何かしたんだろうけど……」

けれど、甘い期待がその言葉で打ち砕かれる。

そいつと別れたのが、どうも夏みたいでさ。それから、アニキは夏になると思い出すのか、おかしくなるんだよ」

……夏。

……拓海も、彼と初めて会ったのは夏だった。

拓海はぎゅつと缶を握る両手に力を込めた。スチールの硬い缶が、微妙にへこむのを感じる。

手に持っていた冷たい缶の感触が、心にまで染み渡ってくるようだった。

拓海は、缶を啓介に押し付ける。

「ん、何だ？」

あ、あの、俺……ちよつとトイレに……」

何だよ、冷えたのか？年寄りくせえなあ」

笑いながら、啓介は拓海の手の中の缶を受け取った。

もうすぐミーティングが始まるらしいから、手っ取り早く戻って来いよ……」

啓介の軽口を背中に聞きながら、拓海は小走りにトイレに向かった。言葉を返す余裕がない。

今、口を開くと号泣する自信があった。

「寂しい、と思う瞬間が無いかな？」

二年前、囁かれた言葉。

ぶと気付いたとき、一人きりの自分に気付いて、どうしようもなく人肌恋しい時があるんだ」

拓海の頬に手を這わせ、目尻にキスを落とし。

「君には、そんな気持ちになった事が無い？」

拓海の腰を抱え、逃げられないようにしながら、すぐ近くまで寄った顔が、そのどこか縋るような切れ長の艶を含んだ瞳が、拓海を捉えて離さない。

抵抗することも出来ず、魅入られたようになってしまった拓海の唇に

彼の唇が触れてきた。

俺は寂しいよ……」

あれが拓海の初めてのキスだった。

寂しい……」

ボタンを外され、自分の服が、器用な彼の指により剥がされていることも、どこか遠くに感じていた。

ただ、彼の目だけをじっと見つめていた。言葉もなく。

だから……温めてくれ」

そしてそのまま、彼の腕は離れず、生まれたての姿になった拓海は彼のものになった。

けれど……。

あ……恋人なんだってさ。忘れられないって言ってたから、別れたか何かしたんだろうけど……」

…そうだ。恋人がいるのなんて、あの時から分かった。

拓海は確かに、あのとき彼のものになった。

だけど、彼は拓海のものになったわけではない。

ただ、それだけの事なのだ。

トイレに駆け込み、真っ直ぐに個室に入る。

その瞬間、溢れてきた涙。

この涙の理由は、彼に恋人がいるのを知ったからではない。

ぞいつと別れたのが、どうも夏みたいでさ。それから、アニキは夏になると思いつのか、おかしくなるんだよ』

あるとき…涼介が自分を抱いたのは、恋人の身代わりだったのだと判ってしまったためだ。

悔しくて、悲しくて、でもそれでも涼介を好きなままの自分が惨めで…。

拓海は泣きながら、自分の胸をぎゅつと握り締めた。

自分がバカみたいだと思った。

涼介に気付かれないように、必死に誤魔化していた自分が。

きつと彼は、もう自分のことなんて忘れている。

恋人の身代わりでしかなかった、一夜だけの相手だった自分など。

髪を切り、男の服装に身をやつし、それでも涼介の傍にいたかった自分が哀れだ。

拓海は薄暗いトイレの中で、秋名のハチロク」と言っ一人の男ではなく、素のままの 藤原拓海」と言っ一人の女に戻り、声を殺し涙を流した。

～第二夜～

藤原、これ終わったら休憩にするか」

はい」

今日もとても暑い日だ。

集配先を一緒にまわっている先輩ドライバーの言葉に、拓海は有難く頷いた。

人知れず峠で涙を流した日から、3日が経っていた。

…傷が癒えたわけではない。

ただ、こうして一生懸命仕事をしていることが、拓海にとっては救いだった。

配達で訪れたコンビニの駐車場で、買ってきた缶コーヒーを口にする。

冷たく冷えたソレを流し込むと、体の何処を通過しているのか解ってしまってくる、今日は暑い。

藤原…お前最近、元氣ねえな。何かあったのか」

急に先輩ドライバーがそんな事を言うので、拓海は、飲んでいたコーヒーを吹き出しそうになった。

え…っ？そんなコトないですよ…普通ですよ…」

そうか。ならいいんだけどよ」

40代も後半になるうかという先輩ドライバー。入社以来拓海の指導係になっているこの人は、なかなか勘が鋭い。

そして、このように心配はしてくれるが、余計な事は一切聞かない。

ま、辛い事があつたんなら、酒でも飲んでさっさと寝ちまうに限るぜ。

俺が昔、女に振られた時は、よくそうしたもんさ…おっと、お前はまだ

未成年だったか？」

そんな彼の言葉に、拓海は肯定も否定もしなかった。ただ、口元を緩めて静かに笑った。

彼は、今では拓海のおき指導者であり、理解者だった。

歳も近い所為か、そんなところが少し、父・文太に似ている…と拓海は思う。

集配を終え営業所へと戻る帰り道、運転を代わってもらえたので、拓海は、助手席で暫しボーっとしていた。

でも実際は、単に意識を飛ばしていた訳ではなく、あの日の事を思い出していた。

あの、二年前の夏の日の――

彼の言った言葉の一つ一つを、大切に…まるで宝箱から取り出すかのように、思い出す。

『寂しい、と思う瞬間が無いのか？』

何もかも持ち備えている人だと…そう思っていただけに、その言葉は意外だった。

ふと気付いたとき、一人きりの自分に気付いて、どうしようもなく人肌恋しい時があるんだ』

どこか憂いを帯びた漆黒の瞳の中に、彼の孤独を感じた。

『君には、そんな気持ちになった事が無い？』

縫るように腰に絡みついた腕が、助けを求めているように思えた。

俺は寂しいよ…』

どこか、甘えるように…

寂しい…』

切なく響く、声。

「だから…温めてくれ」

…ああ、そうだ。

最初から、身代わりだったのだ…自分によく似た、女性の…。

思い出せば出すほど、彼の言葉は、克明にそれを示していた。

なぜ、もっと早くに気が付かなかったのだろう。

こんなにも、好きになる前に…。

恋人がいる事は知っていた。いや、こんな人に恋人がいはいはずがない、と。

でも、たとえば彼に恋人がいたとしても…

あの時、あの瞬間だけは、自分の事だけを想い、愛してくれたのだ

と…そう、信じたかった。

だけど今は、そんな淡い希望さえも打ち砕かれてしまった。

彼が囁いた、あの言葉も…

自分にぶつけられた、激しい欲望も…

自分の面影の奥に見え隠れする、別の女性のものだった。

そしてそれは、二年経った今でも、愛しい人の心を捉えて離さない。

なぜあの日、忘れてしまわなかったのだろう。

想いを断ち切るようにして髪を切った、あの日に。

二年前の、あの夏の日に…。

あつ、いたいた、拓海くん！」

「茂木…」

屋上で、一人ボーっとしていた拓海の静寂を打ち破ったのは、能天気な明るい声の持ち主だった。

茂木なつき…拓海と同級生だ。

なつきとは、つい先月まで同じサッカー部のマネージャーだった。

しかし、なつきが当時付き合っていたサッカー部の先輩を拓海が殴ったのをきっかけに、暫く気まずい関係になっていた。

拓海としては、先輩を殴ったのは、なつきの名誉を守るためだった。

先輩が、なつきとの情事の様子を、自慢げに…事細かに部員たちに話しているのを立ち聞きしてしまった拓海は、気付いたら先輩の胸座を掴み、殴っていた。事情を知らないなつきは、それ以来拓海を避けるようになり、拓海はサッカー部を去ったのだ。

しかし、その後暫く経ってから、別の友人から事の詳細を聞いたなつきは、先輩とは別れ、拓海とも和解した。

なにしてたの？どうせまた、ボーっと考え事でもしてたんでしょ？」

『いだろ…別に。それよか、“拓海くん”はやめろよ。はずかしいだろ

お…」

拓海は、女の子にしては背が高い。そして、父子家庭のせいもあってか、言葉遣いも男っぽかった。

なつきは、そんな拓海をからかって、拓海くんと呼んでいたのだ。

それはそうと、拓海くん、今度の土曜の夜、暇？」

別に用事はないけど…何？」

拓海がそう言つと、なつきは、子供が欲しいおもちゃを親に強請る時のような、悪戯な笑みを浮かべた。

ね、ご飯、一緒に食べに行かない？」

飯……」

そう。ちよつと遠いんだけど、丁市に新しいトラットリアが出来たの。拓海くんも行かない？」

うん……」

はつきり言つて面倒くさい。でも、なつきにこんな風に強請られた時は、なかなか断るのが難しい。

茂木……」

ん？なあに？」

「トラットリア」って……何……？」

「……拓海くん……」

結局、なつきの思惑通りに土曜の夜食事に出席することになった拓海。なつきと駅で落ち合い、やがて、お目当ての店へと到着した。

店は、こじんまりとしていて、いかにも「今オープンしたばかり」といった感じの小綺麗な所だった。

「タリアンレストラン」と言うから、もっと高級なイメージを抱いていた拓海は、少し前から始めたスタンドのバイトの給料と、なけなしの小遣いしか持ち合わせがなかったので、ほつと胸を撫で下ろした。

なつきの説明によれば、「トラットリア」とは、イタリアで言う「大衆食堂」のような場所を指すらしい。

なつきは何故か「帰りの交通費さえあればいいから」と言っていたが、そういう訳にはいかない。拓海は、少しドキドキしながら、なつきの後について店の中に入っていた。

ウェイトレスに通されたのは、他のテーブルとは隔離された小部屋ら

しきドアだった。

しかし、皆様お揃いで「ございます」という、ウェイトレスの言葉に、拓海は首を傾げた。

先にドアを開けたなつきが、「こんばんは、お待ちしました！」と誰かに挨拶をしている。

すると、部屋の中から、「ユウ」という口笛の音や、待っていました！」という男たちの声が聞こえてきた。

「……？」

拓海は、なぜか嫌な予感がした。今日は、なつきと二人きりの食事ではなかったのか？しかし、自分たちの他に人が来ているなんて、なつきの口からは一言も聞いていない。

茂木……？」

拓海が怪訝そうな顔で問いかけると、なつきはペロツと舌を出した。

あれ？そういえばなつき、言つてなかったわけ？ごめんね……実は、他のお友達も一緒なのオ」

言つてなかったわけ？」と言つていながらも、これは確信犯だ。

見知らぬ人間が一緒と分かれば、拓海が絶対に断るだろうことを知っているから、わざと言わなかったのだ。

中にいるのは、数人の男だ。しかも、自分たちよりも年上の――

拓海が、そのドアから離れようと、一歩後ろに下がった瞬間……ふいに、なつきに背を押され、その反動で部屋の中に2、3歩踏み入ってしまった。

あ……！

中にいた男たちは、一瞬好奇の目で拓海に注目した後、拍手喝采した。かつわいい……！

彼女、スタイルいいねえ」

若っけー！。ピチピチじゃん！

呆気にとられている拓海の耳元で、なつきが囁く。

拓海くん：「ゴメン！今日だけ付き合っただけ！」

そう言うとなつきは拓海の腕を引いた。

初めまして。なつきでえーす！こっちは、友達拓海くんです。17

歳です！皆さん、よろしく！」

なつきがそう言った途端、またしても「おお！」という歓声が沸き起こった。

胸が、ムカムカした。

こんな席に、嘘をついてまで自分を連れてきたなつきに、猛烈に腹が立った。どんな事情があるのかは知らない。でも、いくら拓海が世間の若者事情に疎くとも、これが「容コン」と呼ばれる類のものであることは、一目瞭然だった。

隣から、なつきがチラチラと自分の顔色を伺っているのが分かる。

でも拓海は、固く表情を強張らせたままだった。

いつの間にか自己紹介が始まっていたが、拓海は怒りのせいで上の空だった。拳を握り締めて俯いていると、既に酒のだいぶ入った男が、業を煮やしたのか、拓海をからかった。

そっちの彼女、さつきから機嫌悪いみたいだけど、何？もしかして、今日生理？」

その言葉が、ついに拓海の逆鱗に触れた。

ガタツと椅子を鳴らして立ち上がった拓海は、隣にいたなつきの肩へ手を載せた。

茂木…悪いけどオレ、帰るわ…」

え…っ？ちよ、拓海くん…？」

なつきが途中まで追って来たような気もするが、拓海は構わず大股で

すたすたと歩き、店を出た。

ネオンの灯る中、早足で歩き、なつきへの怒りを募らせた。

合コンに誘われた事に腹が立っているワケではない。なつきが嘘をついた事への怒りだった。

どれくらい歩いたのか…暫くすると冷静さが戻り、今度はなつきの事が心配になってきた。

なつきは、悪い子ではないが、少し軽い所がある。そして、男を見る目があまりない。あの中に、まともな男がいたかどうかは定かでないが、もし、変な男に引っかけたら…と思うと、いてもたっても居られなくなった。拓海は、少し立ち止まって考えると、もと来た道に戻ろうと踵を返した。その時…

ドンツと、自分のすぐ後ろを歩いていたらしき人物にぶつかった。

あ、すみませ…」

おいっ！急に止まんじゃないやねーよ…ん…？」

罵声を浴びせられ、ふと聞き覚えのある声に顔を上げると、街灯に照らされた顔が見えた。

おいおい、誰かと思ったら藤原じゃねえか」

御木…先輩…？」

それは、拓海が過去に殴った、なつきの元彼…御木だった。

第三夜

拓海は、咄嗟に身の危険を感じ、素早く御木の脇を通り抜けようとした。しかし、強い力で腕を捉まれ、身動きがとれなくなってしまう。

その間に、御木の仲間と思われる数人の男が、拓海の前に立ちほだかり、行く手を遮った。

「っ、離せよッ！」

必死に振り解こうとするが、腕を掴む御木の手には、更に力が加わった。痛ッ……」

血流が止まるほどの力で捉まれ、拓海の顔が苦痛に歪む。

そして、それを楽しむかのように、御木は拓海の顔を覗き込んだ。

随分なご挨拶じやねえか、藤原ア。折角久々に会ったんだし、ゆつくりお喋りでもしようぜ……」

気味の悪い、嫌らしさを孕む声色。しかし拓海は、なつきの事が心配で、それどころではなかった。

悪いけど、アンタに付き合ってるヒマはないんだ！茂木が……」

言っただけ、しまったと思った。しかし、もう遅い。

拓海がそう言った途端、御木の顔色が変わった。

茂木……なつかか？そついやあ、随分と仲良くオトモダチしてるみてえじやねーか。こうちは、テメエのせいでアイツと別れたつてのによオ……

結構カルくていい女だったのに、テメエのせいでメチャクチャだぜ。

責任、取ってくれんだろつな、藤原ア……」

——多勢に無勢。

それに、いくら拓海でも、力では男に敵わない。

抵抗もままならぬまま、薄暗く狭い路地に引っ張り込まれ、数人に押さえつけられた。

は……なせよ……、離せッ……」

随分と威勢がいいじやねえか、藤原よオ……。お前、自分の立場解つてねエだろ？俺はお前に借りがある。学校じゃ人目が多くて無理だったが、今日こそ返させてもらうぜ……。俺はなあ、お前のコト一発ブン殴んなきゃ、気がすまねえんだよ。それとも、折角だから輪姦しちまうか？なあ、お前……」

御木の言葉に、仲間の男たちの舐めるような視線が、拓海に絡みつく。ち……くしょ……離せッ……」

思い切り手足に力を込めてもビクともしない。拓海は、悔しさに唇を噛み締めた。

卑怯者……俺は、テメエみてえなカスだけは、絶対に許さねえからな……」唸るようにそう呟くと、御木の顔を睨みつける。

「ッ……そんな事言つてられるのも今のうちだぜ。お前のそういうトコがムカツクんだよ！泣いて謝りやー許してやろうと思ったのによ。ホント、クソ生意気なガキだぜ……」

そう言っただけ、御木の手が拓海の顎を掴んだ瞬間……拓海は、頭を振ってその手を振りほどくと、御木の顔に唾を吐き掛けた。

テ……メエ……」

唾を拭いたその拳が、ヒュッと後方に引かれる。

「で……」拓海は咄嗟に目を瞑り、来るべき衝撃に備えて歯を食いしばった。

……しかし、鈍い痛みの代わりに聞こえてきたのは、

何だ、テメエは……？」という、御木の間拔けな声だった。

拓海が恐る恐る目を開けると、御木の拳は静止したままで…その背後には、大きな人影があつた。どうやら御木は、その人物に手首を掴まれているらしい。

「一人の女性に、男が寄つて集つて暴行とは、あまり感心出来ないな」

それは、蔑むような口調とは裏腹に、この場には似つかわしくなくらい穏やかで涼しげな声だつた。

でッ、 teme には関係ねえだろ！ 離せー！！」

御木は、かなり強い力で掴まれているらしく、必死で拳を振り解こうとするも、その腕はビクともしなかつた。喚く御木の手首を、男が背後から捻り上げる。まるで、赤子の手を捻るように、容易く…。

御木の悲鳴が、暗く狭い路地に響き、男が笑いながら手を離すと、御木は手首を押さえ、呻きながらその場にしゃがみ込んだ。

男は、フン、と鼻で笑うと、今度は拓海の手足を押さえている男たちににじり寄つた。

彼女を放してやってくれないか？ どうしてもダメだと言うのなら、仕方ない。 あまり気は進まないが、力ずくで放してもらうしかないな。 こう見えても、俺は有段者なのでね…一応折れないように努力はするが、なにぶん手加減が下手なもので、保証はできないな。

それに、お前たちはまだ高校生だろう？ すぐそこで警官がパトロールをしていたから、補導してもらつても悪くはないな。 …で、どうする？」

御木の仲間たちの、ゴクリと唾を飲み込む音が聞こえる。

しかし、まだ拓海を離そうとはしない。

男は溜息を一つ吐くと、拓海を拘束している男の腕を掴んだ。

仕方がないな…覚悟は出来ているんだろうな？」

その時、背後で蹲っていた御木が立ち上がり、男に殴りかかるうとした。

危ないっ！！

拓海が思わず叫んだのとほぼ同時に、御木の鳩尾には男の拳が埋まつていた。

うっ！ ゲエホゲホッ…」

うわあ、に、逃げるッ！！」

御木の仲間たちは、御木をその場に残して一目散に走り去つた。

男は、鳩尾を押さえて倒れている御木に一瞥をくると、低い声で呟いた。

友達は…選んだほうがいいぜ？」

そして、行こう」と拓海の肩を抱くと、その路地を後にした。

——これが、涼介と拓海の出会いだつた。

暫く肩を抱いたまま、夜の街を歩いた。

未だ震えが止まらない拓海を、涼介が心配する。可哀想に、よほど怖かつたのだろう。

もう大丈夫だから、安心していい」

そう言つて、肩を抱く手に力を込めた。

しかし、拓海から返つてきた言葉は、意外なものだつた。

悔しい…」

は…？」

——悔しかった。

あんな連中に押さえ込まれて、何も出来なかつた自分が。

一瞬でも、恐怖を抱いてしまった自分が。

拓海の体が震えていたのは、抵抗出来なかった自分への悔しさからだっただけだ。

一方で、その事に気付いた涼介は、目を丸くした。

あれ程の男たちに囲まれて、怖くなかったというのか？ 自分が現れなければ、あの場で犯されていたかもしれないというのに…。」

それは、彼の生涯の中でも数少ない、自慢のポーカーフェイスが崩れた瞬間でもあった。呆氣に取られて立ち止まる涼介にはお構いなしに拓海はズンズンと一人歩いてゆき、その肩を抱いていたはずの涼介の手だけが、中途半端に宙に浮いた。

感情に任せて、どれくらい歩いただろうか…ようやく我に返った拓海は、自分を助けてくれた人物の存在を思い出し、涼介の方を振り返った。あ…っ、すみません、助けていただいたのに…あのっ、有難うござ…」

街灯に照らされたその顔を見た瞬間、拓海は言葉を詰まらせた。

それは、自分を助けてくれた男の容貌が、あまりにも想像と違っていたためだった。

先程の出来事と、『有段者』という言葉から、もっとガタイのいい、ゴツイ感じをイメージしていたのに…。目の前のその人は、それとは程遠い涼しげな雰囲気を感じていた。

背は高く、品の良さそうな服を身につけ、切れ長の目を持った端正な顔立ち…。それは、決して面食いではない拓海でさえも、思わず見惚れてしまうほどだった。

そして、それに追い討ちをかけるように、涼介がニッコリと微笑む。

「よかった。助けてはいけなかったのかと思ったよ…」

そう言っつて、可笑しそうに笑った。

そんな涼介の様子を見て、今までの自分を思い出した拓海は、途端に恥ずかしくなり、頬を赤く染めて俯いた。

ホント…すみません。助かりました…」

先程までの勢いはどこへやら…急にしどろもどろになって俯く拓海に、涼介はクスリと笑った。

恥には及ばないよ。でも、もしよかったら夕食に付き合ってくれないか？ 俺も、君が出て行った後にすぐ退散したものでね。メシがまだなんだ」

「…？」

不思議そうに首を傾げる拓海を見て、涼介が気付いたように付け足した。

ああ…、君はずっと俯いていたから、気付かなかったかもしれないな。さっきのあのレストランに、俺も居たんだ。すっかり悪友に騙されてな。たまに飲みに行こうと言っつので付いて来たら、あのザマだ。君も…だろ？」

ああ、そうです。茂木に騙されて…茂木…？」

そう言っつた途端、拓海は弾かれたように顔を上げた。さっきまでのゴタゴタで、すっかり忘れてしまっていた事を思い出したのだ。

大変だ！茂木が…」

待て！

先程のレストランの方へと走り出そうとする拓海を、涼介が静止した。心配するな。君の友達のことなら、大丈夫だ。ちゃんと家まで送り届けるようにと、奴らに言っつてある。ついでに、手を出したらタダじゃおか…っつてな。心配は要らない。俺との約束を反故にする度胸など、アイツらにはないからな…」

そう言っつてフツ…と微笑むと、拓海の頭に手を伸ばし、クシヤクシヤと撫でた。

拓海は、少し放心したように涼介を見上げた。

ああ…この人は、なんて大人なんだろう。騙されてあんな所まで連れて来られたというのに、自分の友人のことまで気遣ってくれて。

今夜は、何だか色んなことが沢山ありすぎて、頭の中の收拾がつかない。けれど、頭を撫でられているうちに、だんだんと気分も落ち着いてきて、張り詰めていたものが解かされていくように感じた。

そして同時に、忘れ去られていた生理的現象も蘇る。

あの…何から何まで、本当に…」

そう言っつた瞬間、拓海の腹の虫が鳴いた。

あ…っ！」

顔を真っ赤にした拓海は、腹を抑えてその場にしゃがみ込んだ。

すみません…なんか安心したら、腹減っちゃって…」

そんな拓海の行動の一つ一つが新鮮で、可愛らしくて…

涼介は、笑いながら手を差し伸べた。

じゃ、決定だな。晩飯、付き合ってくれるだろ？」

もっつ、この娘と話してみたいと思った。

食事は、いつの間にか目的ではなく、口実に変わっていた。

差し出した掌に、遠慮がちに重ねられた、細く小さな手――

その手を掴むと、二人は夜の街へと吸い込まれていった。

〜第四夜〜

大通りを我が物顔で横行する車から排出された排ガスの匂いと、夏の夜のじつとりとした生温かさ。

昼間の攻撃的な暑さとは違つ、どこかよそよそしさを感じるその暑さが拓海は苦手だった。

元々、家業である豆腐屋を手伝っているため、拓海の朝は早い。自然と夜も早く眠ることが多く、今時小学生でも眠らないだろう早い時間に拓海は床に着く。

まだ眠る時間には早い、あと1、2時間もすればいつもの睡眠時刻が訪れてくる。

本当なら差し出された手を無視して、帰る」と言うのがいつもの自分だ。

けれど、拓海はその手を取った。

危ないところを助けて貰ったから、とか。

お腹が空いているから、とか。

そんな理由が言い訳にしか過ぎないことを拓海はもう知っている。躊躇いはあつたが、拓海はこの手を取りたいと、そう思ったのだ。

夏の夜の不快な暑さも吹き飛ばすような、怜悯な印象のこの青年の。さりげない仕草で腕を取られ、拓海の背中に彼の腕が回される。

行「うっか？」

緊張する拓海を安堵する柔らかい笑みと、促すようなその手の、物慣れた仕草に色んな意味で経験地が違つことを暗示され、拓海は気後れを感じる。

いたたまれず逃げ出したい、とそう感じた心を察するように拓海の手を握る涼介の指の力が強まる。

君は何が好き？何を食へようか？」

優しいな声音と笑顔。

それに晒され、拓海の鼓動が大きく跳ねる。

いや、この青年の顔を見た瞬間から鼓動は早まっている。今のそれは、さらに鼓動を早め、早鐘を打っている。

「え、別に好き嫌いとかは…」

戸惑いながらも拓海は答えた。

涼介の顔をまともに見ることが出来ない。

顔が真っ赤に染まり、その柔和に細められた目で見つめられていると思っただけで恥ずかしい。

そっ？じゃあ、俺が決めていいか？」

優しく促しながらも、強引に進む手。ぎゅつと握り締められた手に、

暑さとは違う熱さを拓海は感じた。

拓海は男性に免疫が無い。

背が高く、中性的と言えば聞こえはいいが、小柄で、出るところの出た体つきの茂木などに比べると、同年代の異性からそう言う対象に見られることが少ない。また、拓海のそっけない態度もそれに拍車をかけて、幼馴染の武内イツキのように、友人には見られても女性として扱われることが無かった。

しかし。

目の前の年上の彼は違つ。

拓海が今まで見た事のないくらい、モデルか芸能人のような優れた容姿を持っていながら、拓海を見下すことなくちゃんと女性として扱ってくれる。

それに嬉しさを感じながら、彼に女性として幻滅される恐さも覚えている。

そんな感覚は拓海にとって初めてのことであった。

喜びと怖れの感情の中、けれど拓海はそれから逃げ出そうとは思わなかった。

拓海の返事を待たず、歩き始めた涼介の背中を見ながら、引かれる手を拓海は遠慮がちに握った。

真夏の夜の下。

今、自分に芽生えた感情が、どんなものなのかを理解しないままに。

店に案内され、小さな個室のような部屋に通され向かい合わせに席に着き、メニューを開いた時に拓海は後悔をした。

ファミレスやファーストフードを定番とする高校生には、ちよつと痛い金額設定であつたから。

どうしよう、焦りながらメニューを眺め、戸惑い涼介にチラリと視線を移せば、彼はすぐに気付いて心配そうな表情を見せた。

どうした？もしかしてこつ言つのは苦手だった？

い、いえ、そつじゃなくて……

お金が無い。こつ言つのは恥ずかしいが仕方がない。拓海は口を開き、ボソボソと言いくそつに事実を語つた。

あの…持ち合わせがそんなに無くて…

えつ…

するとその後の涼介の表情は見物だった。切れ長の眼をいっぱいに見開き、ぽかんと口を開けた顔で呆然としている。

拓海はそんな涼介の反応に、羞恥よりも悲しみを覚えた。お金が無いなんてこつ自分に、呆れられたのだと思つたのだ。

そしてそれを裏付けるように、涼介が呟いた。

「……参つたな」

自嘲気味に顔を歪める涼介に、いたたまれず拓海は席を立つた。

あの、すみません…。オレ…帰りますから…

だが去ろうとするより早く、涼介の手がテーブルに乗せていた拓海の手首を握り締める。

待つて」

大きな声はでない。けれど鋭く、強い声に、拓海の動きが止まる。

そして涼介の顔を見ると、そこにあつたのは戸惑いでも困惑でもない。射抜くかのように自分を強い眼差しで見つめる瞳の彼がいた。

拓海はその瞳に怖れを感じる。

ただ漠然と感じたその恐怖は、肉食獣に見つめられた獲物のそれに似ている。

そつじゃない。帰らないでくれ」

なのに強かつた瞳の力が弱まり、途端に拓海に哀願するように切ない色を浮かべる。強と、弱。それに惑わされ、拓海はまた席に戻つた。けれど手首を握る涼介の手は離れない。

誤解させたみたいだな。すまない。本当にこつ言つ意味じゃないんだ」

手首を握る涼介の指が動く。ゆつくりと、拓海の手首の大きさを確かめるように包み、そしてそこに浮いた細い腱と、肌の感触を確かめるように指がそれらをなぞる。その感触に、拓海は背中にゾクリとした感覚が走つた。だがまだ彼女はそれが快感の予兆だとは知らない。

「こは俺が奢るよ。俺が誘つて、君に付き合つてもらつてゐるんだからね。当然だよ」

でも、それじゃ…」

涼介の瞳がまた光る。また捕食者の光を湛え。

「君は、こんなふうな男に誘われたことが無い？」

それは暗に、自分が拓海をそう言った意味で誘っているのだと語っていた。

しかしもちろん拓海は気付かない。単に、友達以外の人間に食事に誘われただけの意味だと思っている。

はい。友達ともあまり食事とかしないし、それにこういう店は初めてです」

きよとん、とした表情で答える拓海に、涼介が苦笑した。

「本当に、俺が悪い大人に思えてきたな」

この言葉の意味を拓海は理解できない。

はい？」

きよの、参ったな』つてのはだから自分へ向けたものさ。俺が、君をたぶらかす悪い人間なんだなと自嘲したんだ」

そうなんですか？でも…きよ助けてくれましたし、悪い人じゃなくて、良い人だと思いますけど」

慰めるために発した拓海の手紙は、けれど彼を慰めるどころかさらに落ち込ませたらしい。涼介は頭を抱え、大きな溜息を吐いた。

その反応に拓海も焦る。

ど、どうしよう、とオロオロとフォローの手紙を探すが、自分の手紙でさらに落ち込んだふうな彼を見ると、迂闊に喋れずただ戸惑うしか出来なかった。

「それがわざとだとしたら恐ろしいな」

恐ろしい。

その手紙に、今度は拓海が落ち込む。

どうやら自分は涼介に対し、とても酷いことを無意識に言ってしまったようだった。

「…すみません」

項垂れ、落ち込む拓海に、今度は涼介が焦った。

「やーそつじゃなくて…本当に参ったな…」

また彼を困らせてしまったようだ。おそろおそろ顔を上げてみれば、けれどそこにいたのは拓海が想像していた不機嫌な表情ではなく、落ち着いた大人だと思っていた霧困気を崩し、少年のように頬を赤らめ、動揺を顔いっぱい現している涼介の姿だった。

驚き、思わずマジマジと見つめてしまえば、その視線に気付いた涼介が、気まずそうに眼を逸らす。

けれどその眼が、決意を持って拓海に戻る。さっきまでの捕食者のそれとも違う、真剣で、真摯な眼差しで見つめられ、拓海の頬もつられて赤くなった。

「言い訳のようだが…こんなふうな急ぐつもりじゃなかったんだ」

言い訳？」

…何の？またきよとんと首をかしげるが、涼介はそれに構わず話を続ける。

むつと、君と話したいと思った。そしてこれから親しくなればいと、それだけを思っていたんだ」

はあ……」

告白めいた雰囲気とセリフ、それに拓海は動揺し、ウロウロと視線を彷徨わす。心臓はバクバクと早鐘を打ち、酒も飲んでいないのに体中が真っ赤だ。

けれど涼介の告白はまだ続いた。

奥手な拓海の予想の範疇を超えた領域まで。

でも、俺はそれだけじゃ満足できないらしい」

握られている手首に力がこもる。絶対に逃がさない。そんな思いを込

めて。

その力の強さに、拓海は涼介の顔を見つめる。そこにあったのは、彼の言葉が、思いが嘘ではないのだと知らせる、自分へ向けられた眼の強さ。懇願する心がそこに一心に溢れている。

君が欲しい」

握られた手首を引き寄せられる。じつと拓海の顔を見つめたまま、涼介が引き寄せた拓海の指にキスをした。

拓海は魅入られたように動けない。

鈍い拓海にも、その言葉が、そして仕草がセクシャルなものを表しているのだと気付いている。けれど何も反応できない。まるで蛇に睨まれた蛙だ。けれど蛙と違うのは、拓海には恐怖だけではない。恐怖に似た甘美な誘惑に身が竦んでいる。

君には遠まわしな表現では伝わらないようだから、はつきり言っよ」

拓海の手を、涼介が両手で包み込み、指で拓海の手をなぞり、そして愛おしむようなキスを降らせる。

元々、下心があつたんだよ」

「した、ごころ……？」

ドクドクと自分の鼓動の音と、涼介の声しか耳に聞こえない。店内のざわめきも、緩やかに流れる音楽も。

騙され連れられて行った店で、君を見つけた。腹が立っていたはずなのに、君が店に入ってきた瞬間に、俺は嬉しくなったんだよ。

でも、自分でもなぜ嬉しく思ったのか分からなかった。だからすぐに店を出てしまった君を追いかけた。

そしてそこで、他の男たちに絡まれている君を見つけた。

腹が立つたよ。どうしようもないくらい。頭に血が上るつてのは、こう言っことを言っただろうなと、そう思った。だから思わず…有段者』

だってハツタリかましてた」

「あれ…嘘、だったんですか？」

涼介は苦笑する。

まったくの嘘つてわけじゃない。段は持つてるよ。でも、有段者と聞いて何の段だと思った？」

悪戯っぽい笑みに、拓海の緊張が僅かに解ける。

そしてタイミング良く、店員が二人のテーブルに注文を聞きにくる。

涼介が話を止め、メニューを片手にスラスラと注文を始める。時おり、「これは大丈夫？」や、未成年だからソフトドリンクでいいよな。ウーロン茶とかでいい？」などと聞いてきた他は、意見を聞かない。そんな姿に、強引な人なのかとは思いつが、どちらかと言つと自己主張の激しくない拓海は心地好さを覚える。強引だけれど、横暴ではない。何より任せ彼のペースに流されることで安心感がある。

注文を終え、すぐに店員が飲み物のグラスを二つ持ってくる。

笑顔で、じゃ、乾杯」とグラスを合わせ、一口飲んだところで、涼介が話を戻す。

「ごめん。さっきの続き、いいかな？」

拓海も頷き、口を開く。さっきよりも緊張が解け、涼介に対する信頼度が増している。

え、と…有段者の話？」

そつ。何の段を持つていると思ったか、聞いていいかな？」

あの状況で「有段者」と言われ、さらに相手の骨を折るような表現も付け加えられたところから、拓海は漠然と空手の有段者なのだと思うた。

「空手、とか」

普通はそう思っだらうね」

その悪戯を企んだような表情に、拓海は察する。

わざと、そんなふうに言ったんですか？」

「正解。ああ言えば相手がそう受け取るだろうと予測はしてたよ。でも嘘は言っていない。確かに俺は有段者ではあるし、状況によっては骨も折れる。ただ、あの場ではそれは難しかっただろうけど」

「本当は何の有段者なんですか？」

剣道」

拓海は思わず噴出した。確かに、剣道では竹刀があるなら骨を折るのは出来るだろうが、素手では難しいだろう。

弟は空手をやってただけだね。あいつは型にハマるのが苦手だから、本当なら段を取れる実力があつたのに取っていないんだ」

弟、いるんですか？」

ああ、一人だけ。君は、兄弟とかいるのか？」

いえ、オレじゃなくて、わたしは一人っ子です」

つい、気の緩みから、いつもの呼称の「オレ」と言いそうになり、慌ててわたし」と言い直す。涼介の前で男口調の自分に恥ずかしさを覚えた。前は女らしいことをするのに気恥ずかしさを覚えたが、今はその逆だ。彼の前で女でいたいと、そう無意識に思う。

「話がズレたな。戻していいか？」

店員が来たことで離れていた手を、また涼介の指が握る。その感触に慣れ始めている自分を拓海は自覚する。そして離れていた間、この指の感触がないことに寂しさを感じていたことも。

「はい」

ありがとう、と小さく涼介が呟く。握る手に、力と熱が増す。

君を何とか助けて…ハツタリ交じりだけだね。少しか会話をして、もつと話してみたいと思った。だから食事に誘った。そしてこの店に来て、

君と話をしてみて……」

沈黙が間を作る。

涼介がじつと拓海を見つめる。そして拓海もまた涼介を見つめた。君を…離したくないと思った」

キーン、と耳鳴りがするようだった。

君が欲しい」

あの……」

性急なのは分かっている。でも…どうしても君を俺のものにしたい。馬鹿みたいに焦っている。安心したいんだ」

あの、でも、何でオレなんか…」

分からないよ。けれど…恋なんてそんなものだろう？」

恋……」

胸が騒ぐ。

それは何も生まれて初めての告白だったからではない。

見た瞬間から、このざわめきは始まっている。

自分も、涼介の告白と同様に彼を見て、惹かれ、そして一緒にいたいと思った。御木たちの時には不快と嫌悪しか感じなかった指の感触に、恥ずかしさとともに喜びを感じる。

涼介の言葉をじっくりと噛み締め、そしてどんどん拓海の内部に浸透していく。

急速に。けれど確実に。

涼介と出会った瞬間から始まっていた衝動は、拓海の中ではつきりとした形で留まり、そして拭い去れないほどに大きくなり根付いた。

オレ…」

まだ曖昧にしか掴めない感情を、言葉にしようと拓海が口を開く。

けれど涼介がそれを留めた。

答えは食べてからでいい。空腹は人の判断力を鈍らせる」

その言葉とともに、店員が料理を運びやってくる。拓海は、「ここが他に人がたくさんいる店であることを忘れていた。それを恥じらい、頬を染め俯いた。

本当は君を騙してでも、俺のものにしたいんだが……それでは空しい。嘘やごまかしのない状況で君が欲しい。……覚悟していてくれ」

涼介の言葉に、拓海の中にも決意が生まれる。

彼が暗示する意味を、拓海は漠然としか理解できない。けれど、その言葉の中に含まれた涼介の真剣さは理解した。

だから、拓海は頷いた。

「……はい」

覚悟を決めて。

第五夜

細く長い、しなやかな指が髪に触れる。

根元から毛先までなぞるように滑り、サラサラと零れた髪が肩で揺れる。

「綺麗な髪だ」

耳元でよく響く低音の声で囁かれ、思わず身動き体を引く。けれどしっかりと腰に回った腕がそれを許さない。

髪の毛。

それは唯一拓海が女性を意識した部分だ。

ずっとショートだった拓海が髪を伸ばし始めたのは、高校に入つてすぐの事だ。

中学生だった時はまだ愛らしさを残していた同級生の女の子たちが、高校に入った途端、一斉に花開くように大人びていく。綺麗になつていく友人たちの中で、一人だけ男っぽい身なりの自分を恥ずかしく思うのは、拓海の年頃では普通の成り行きだろう。

とは言っても生来の性格のせいで、茂木や他の少女たちのようにあからさまに女を主張することは出来ない。

服装もラフで。化粧気もなく、髪型を気にすることもない。だけど髪の毛を伸ばしているだけで「男？」と間違われていたのが、今ではちゃんと女だと分かってくれる。

あ、あの……」

手馴れた仕草と、けれどそれに反するように熱っぽい眼差しと指。それに晒され、全くの未経験の拓海には戸惑うばかりだ。

食事を終え、涼介は拓海を当たり前のように高級ホテルに連れ込む。

きらびやかな雰囲気のリビーに拓海を待たせ、カウンターに向かった涼介が鍵を手に戻ってくる。

「行こうか」

腰を抱かれ、まるで恋人同士のように寄り添いエレベータに乗った。

その間の拓海は、緊張が限界を超え、意識が朦朧としていたため記憶が定かではない。ただ、目の前をすぎていく眩い変化と、そして壊れたように早いスピードで走り続ける自分の心臓の鼓動の音を聞いていただけだ。

けれど、涼介がカードキーで開けた部屋の中に通された瞬間、朦朧としていた意識が一気に覚醒する。

普通のランクの部屋ではないと一目で分かる、柔らかな間接照明と広く大きなダブルベッドが視界に入る。それが目に入った途端、拓海は自分がここに何をしに来たのかを悟り、一気に熱が上昇した。

そしてそれをさらに増長するように、入り口に入ったまま固まってしまった拓海を、背後から涼介が抱きしめる。腰に回された腕と、肩口に感じる彼の吐息。ビクリ、と跳ねた体をもとめせず、涼介の拘束は強まる。

緊張に強張る拓海を宥めるように、涼介が髪を撫でる。耳元に甘い囁きを送り、そしてその唇で耳を噛み、頬に触れるだけのキスをする。

「……怖い？」

囁かれた言葉に、拓海はやっとの思いで頷いた。

「大丈夫だ。ほら……」

涼介が震える拓海の手を握った。

ぎゅっと握られた手のひらは温かく、熱っぽかった。

「温かいだろう？」

拓海は頷く。

大がどうしてセックスをするのだと思う？」

卑猥な言葉に慣れていない拓海は、たかがそんな言葉だけで体中を真っ赤に染めた。そんな拓海に、頭上から涼介の含み笑いが零れてくる。

「寂しいからだよ」

「き、びしい？」

「ああ。君は……寂しいと思う瞬間が無いかな？」

素直に答えるなら、YESだ。けれど涼介が問うのはもっとセクシャルな意味なのだろうか。戸惑い、拓海は答えを返せない。

ふと気付いたとき、一人きりの自分に気付いて、どうしようもなく人肌恋しい時があるんだ」

手を握っていた手のひらが、拓海の頬を撫で、唇が目尻にキスを落とす。

「君には、そんな気持ちになった事が無い？」

哀願するような響きに、思わず涼介の顔を振り返り見れば、そこには縫うような眼差しで自分を見る彼の瞳が間近に迫っていた。

俺は寂しいよ……」

顔が近付く。隙間がないほどに寄せられ、意外と柔らかな唇が拓海の口を塞いだ。

軽く触れるだけだったキスは、すぐに悪戯するように拓海の唇を舐め、薄く開いたそこに涼介の舌が潜り込む。

初めてのキス。そしてもっと深いキス。

「ん、あ……」

拓海には吐息を漏らすことしか出来ない。

塞がれた口で息をすることが出来ず、やっと離れた唇に、慌てて呼吸を繰り返せば、涼介の笑いと瞳の中の熱は強くなった。

寂しいから……こうやって体温を分け合って暖めあうんだ」

愛おしむように髪を、頬を撫でられ、そしてまた軽くキスを受ける。
だから……温めてくれ」

涼介の腕が、視線が拓海の動きを封じる。

口元は笑みを浮かべているのに、その瞳はまるで飢えた獣のような癡
猛さをはらんでいる。

それに射抜かれ、拓海は自分が今から貪り食われる草食動物のよう
な心地を味わっていた。

恐い。

けれど、あの牙が自分の肌に食い込んだ瞬間を切望する自分もまたい
る。

器用そうだと、思った彼の指は、その予想通りに器用に動き、キスを交
わしながら拓海の体から服を取り去っていく。

ボタンを外され、布地を取り剥がされ、剥き出しになり産毛だった拓
海の素肌の上を、そのしなやかな印象から冷たいと思いついていた指が、
拓海の体に熱を残していく。

綺麗だな……」

胸の上の隆起を確かめるように涼介の手が這う。

そして固く尖った色の濃い部分を指で挟み、やんわりと揉みこんだ。

「やあー」

ビリッ、と走った電気のような感覚に、拓海の足が萎える。倒れそうに
なった体を涼介の腕が支え、そのまま彼女を抱き上げ、部屋の中央に位
置する柔らかなスプリングのベッドの上に寝かせた。

肌理の細かい、手触りの良いベッドカバーの感触。それを素肌で感じ、
拓海は身じろいだ。

けれど拓海はそこから逃げようとしなない。

自分を射抜くように見つめる涼介の瞳が、拓海を捉えて離さない。

そして涼介が拓海を見つめたまま、自身の服を脱ぎ始める。

シャツに手をかけ、現れた鍛えられた均整の取れた体。男っぽいとは
言われるが、拓海のものとは明らかに違う男の肉体に拓海は目を離せ
ない。隆起した筋肉。柔らかな部分など一切ない張り詰めた体となめ
し皮のような肌。

拓海の視線をもちろん承知しているのだろう。拓海にわざと見せるよ
うに、ゆっくりと涼介が服を剥いでいく。そしてその指が、下半身に向か
った瞬間、拓海の咽喉が鳴る。

ファスナーを下ろし、現れたそこは拓海が今まで知る男性の概念の全
てを壊した。

生々しい、男と言う性を端的に表したそこに、拓海は慌てて目を逸ら
す。けれど一瞬だけ垣間見たその光景は拓海の脳裏に焼きついた。

恐い。

恐くてたまらない。

あれを見た瞬間、男っぽいとは言われながらも、自分は絶対に男では
ないのだということを自覚した。

そしてまた、自分が弱いだけの一人の女でしかないのだと。

体が勝手に震えだす。

けれどふと頬に触れる感触に目を開けば、そっと体重をかけないよう
に自分に覆いかぶさる涼介の姿が見えた。

「こっちを向いて」

恐い凶器のようなもので自分に迫りながら、その表情は頼りない弱さ
を見せていた。

まるで彼にとつては、自分のほうが恐い存在であるように。

おそるおそる触れてくる指。触れた瞬間に、生理的にビクリと跳ね、
すぐに涼介の指が離れるが、ゆっくりと宥めるように触れてきた手に

拓海の震えが止まれば、安堵したように涼介が笑顔で息を吐いた。
初めて会ったばかりでこんな事を言っても信じられないかも知れないが……」

遠慮がちだった涼介の体が拓海に覆いかぶさる。初めて触れ合う他人の肌の感触と熱。それに拓海は、さっきの涼介の言葉を思い出す。

寂しいから……うやつて体温を分け合って暖めあうんだ』

それは「う言っ」となのだろうと拓海は理解した。
そして。

「……好きだ。どうしようも無いほど」

涼介の腕が拓海の体に回り、強く抱きしめる。彼の肌の奥から、感情のままの熱が伝わるようだった。

拓海もまた、おそろおそろではあるが涼介の背中に腕を回し、抱きしめ返した。

そうすると、もつと心地良いことを拓海は知った。

この体温が在ることを、拓海は嬉しいと思う。離れないで欲しいと願う。

もつと。もつと深く、溶け合うまで触れていたいと思った。

今まで、拓海は寂しいと実感することが無かった。

それは温もりを知らなかったから。

「才、しも……好……」

高まった熱が全身を支配する。ぼうつとなった頭で、今の気持ちを表す言葉を返そうとするが、最後まで言えず涼介の口の中に消えた。

けれど、きつとその言葉は涼介には聞こえてははずだ。

「……好きだよ」

拓海を抱きしめる涼介の熱が強くなったから。

好きだ……」

や……、……あ……」

拓海の唇から漏れるのは、もう零れるように吐き出された吐息だけ。離したくない……」

言葉の通りに、拓海は彼と隙間のないぐらいに交わりあった。

熱に浮かされたような衝動の中、拓海がずっと感じていたのは身を裂くような痛みと、それとは反比例する幸福感。

自然と零れた涙を涼介の舌が掬い取る。

「……めん」

小さな声で謝る彼の声に、拓海は首を横に振り、涼介の首にしがみ付いた。

初めて味わう行為に、拓海は恐さと痛みと苦しさ、そして何より喜びを感じた。

体の奥に彼の熱を感じ、生まれて初めて自分が女であることを嬉しく、また誇りに感じた。

けれど――。

幸福は長くは続かなかった。

初めての経験に、熱が収まった後に彼の腕の中で泥のように眠り、そして目が覚めたとき拓海は一人だった。

ガラんとした広いセミスイートの部屋。

痛む腰を抱え、拓海は立ち上がり涼介を探した。

バスルームにいたのだと思ったのに、そこは無機質な冷たさしか見えなかった。

そして……。

「……な、に、コレ……」

ふと見たベッド脇のサイドテーブルの上に、数枚の紙幣と、慌てたような字で「先に帰る」書かれたメモが残されていた。

拓海はその意味を分かりたくなかった。何も知らないまま、愚かでいたかった。

けれど嫌が応でも、それが意味するところなど理解できてしまう。

「オレ…遊ばれたんだ…」

彼が残っていた紙幣の上に、水滴がポタポタと零れ落ち濡らしていく。

涙が止まらない。

嗚咽を上げ、メモを破り捨てて枕を投げた。

それらが無意味なことなんて拓海は分かっている。

幸せだと思ったのに。

でもあれは全部嘘だった。

彼の気紛れな行為の、たまたま相手として目を付けられただけのこと。

「好きだって…嘘つき…」

小さな子供のように泣きじゃくり、夜だった窓の外の風景がどんどん明るくなっていく。

真つ赤な朝焼けをベッドの上から眺めながら、拓海はさんざん泣き腫らした顔のまま呟いた。

「女なんて…やだ…」

ふと見た部屋の隅の鏡に、自分の顔が映る。

あの時に見た彼の裸身とは違う、柔らかな体に白い肌。そして肩まで届く長い髪。

その日、すぐに拓海は髪を切った。

今までの服は全部筆筒の奥に仕舞い、男物の服を選びそれを身に着けるようになった。

男っぽいと言った表現だった拓海は、それから以後、男と間違われるまでに女を捨てた。

恐さと苦しさ喜びと、…そして切なさ悲しさを与えた男によって。思えば、彼は自分の名前も聞かなかった。

君』

としか呼ばない彼。そして自分に名前すら教えなかった。

それらの事実が最初から示していたのに、愚かな拓海が彼の嘘を本気にして信じてしまった。ただそれだけのことだったのだ。

あれから二年。

未だ記憶は消えず、そして新たな傷を作る。

第六夜

じつとりと湿気を含んだ空気が、夜の闇に沈殿してゆく。
それはまるで、払っても払っても纏わりつく、醒めない夢のようで…

史浩

啓介か。…どうした？」

ミーティングを終え、メンバーが解散した後の駐車場に残っているのは、啓介と史浩、そしてメカニクスの二人と涼介だけだった。

いつになく神妙な顔で近づいてくる啓介に、何かあったのか？と尋ねると、軽く顎をしゃくった先にいたのは、FCに寄り掛かってタバコを吸う涼介だった。

また、か？」

ああ…」

そんな二人の遣り取りに、松本は何かを感じ取ったのか、
うや、俺はこれで…」

と頭を下げると、その場を去った。

それを見たFDのメカニクの宮口も、

あつ、俺も…ッ、失礼します！」

と会釈をすると、慌てるように帰路に着く。

宮口の車の音が遠のき、駐車場は暫し静寂に包まれた。

ただ、時折生暖かい風が頬を掠めるだけで、重苦しいというよりは、
どこか切ない空気が峠を包み込んでいた。

今はもう、公の場で活躍することが無くなった愛車に寄り掛かり、少し空を仰ぐように顎を上げ、時折ゆつくりと吐き出す煙が、夜の闇に吸

い込まれてゆく。

星も無い夜空…。その瞳は、それを見上げるといふよりは、真つ暗な空間をただ彷徨っているようにも見えた。

そんな、どこか放心した彼の心情を表すかのように、ポトリ…と、その重みに耐え切れなくなった灰が、地面に落ちて碎けた。

心配そうに表情を曇らせる啓介の肩を、史浩が軽く叩いた。

そんな顔をするな。大丈夫だ、俺に任せろ」

そう言つて微笑む史浩に、啓介は、どこか縋るような曖昧な笑みを浮かべると、

うや、俺帰つから…アニキのこと、頼むな…」

そう言つて、FDに乗り込んだ。

啓介のエキゾーストが遠のく中、史浩は涼介の傍に歩み寄った。

涼介。俺たちも、そろそろ帰らないか」

「ああ…。他の奴らは、もう帰つたのか」

声を掛けられて初めて気付いたといふよりは、耳から入った情報を脳が受け止めるまでに時間がかかった、という感じで、少し間をおいて涼介は答えた。

そんな彼の様子に心の中で苦笑しながらも、史浩は涼介に持ちかけた。
なあ、よかったら、これから一杯付き合わないか？」

そんな彼の申し出に、『や、俺は…』と答えた涼介だが、少し考えてからそうだな…。たまにはいいかもしれない』と言つと、FCに乗るように史浩に促した。

一旦家に戻り、車を置いてから訪れた居酒屋。

馬鹿騒ぎをする若者がいるわけでもなく、落ち着いた雰囲気のところは、二人の行きつけの店でもあった。

少し立て付けの悪い引き戸を開けて暖簾をくぐると、『うっしやい…まあ！』という女将の声が響いた。

高橋君じゃないの！まあまあ…『無沙汰ねえ。史君も！元気だった？』40代も後半くらいだろう女将は、いつもと変わらぬ絞り袖の出で立ちで、二人を迎えた。

ええ、お陰様で。女将さんも、お変わりないようですねによりです」

そう言って涼介が微笑むと、女将は嬉しそうに笑って言った。

ふふっ。相変わらずいい男ね。今日は、ゆっくり飲んでって頂戴」

そんな遣り取りをしていると、ふいにカウンターの端で酒を飲んでいた男が振り返った。

涼介…さん？」

驚いたようにそう呟いたのは、ハチロクのメカニックである松本だった。

「松本！お前も飲みに来てたのか？」と史浩が言うと、松本は決まりが悪そうに答えた。

はは…。まさかお二人が、この常連さんとは知りませんでしたよ。

俺はそろそろ帰りますんで、お二人ともどうぞゆっくり…女将さん、お勘定を」

そう言って立ち上がろうとする松本を、女将が止めた。

何言ってるの、松ちゃん。今来たばかりじゃない」

松本は、少し困ったように微笑むと、何か言おうと口を開きかけた。すると、

松本。何を気を使っているのかは知らないが、俺達は別に気にしないぜ。お前さえよければ、一緒に飲もう」

涼介がそう言ったものの、松本はまだ都合が悪そうに、チラッと、史浩の顔を伺い見た。それに気付いた史浩も、

涼介がこう言っただ。どうだ松本、一緒に」と勧める。

はい、では、遠慮なく」

そう言っつと、いつもと変わらぬ静かな物腰で、松本は二人の隣に腰掛けた。

このメンバーで話す共通の話題といえば、もちろんプロジェクトの事になる。

しばらく、次回の遠征先や対戦相手、コースの攻略法などについて語り合っていると、話は自然に、ダブルエースの二人の事へと向けられた。

啓介とは、実の兄である涼介を含めて、皆付き合いが長い。その所為か、話題はすぐにエースの片割れである拓海へと移っていった。

すると、今までずっと黙って頷いたり、相槌を打っていただけだった松本が、途端に重い口を開いた。

藤原…最近何かありましたね」

急に意味ありげな言葉を吐いた松本に、すかさず涼介が問うた。

どうしてそう思う？」

松本は、うーん…」と考えてから、

何が、とは言えないんですがね。俺は、この春からずっとハチロクと藤原を見てきたじゃないですか。それで、何となくですが、車の変化もあいつの変化も、解るようになってきたというか…」

「え…俺には、いつもの藤原にしか見えなかったけどな。たとえば、どんな事なんだ？」

松本の言葉に興味を示した史浩が、少し身を乗り出して尋ねた。

たとえば、あいつは、いつもどこかボーっとしているように見えるけど、単に考え事をしているのか、そうじゃないのかの区別がつくようになったというか…。ハチロクにしたってそうです。タイムに変化はなくなるとも藤原がどんなコンディションで走っているのか、タイヤの減り具合とかで

解つたりするんです。自分でも、すごく不思議なんですがね…」

「えー、そういうもののなの？」

史浩は感心したように溜息を吐くと、さすがは、Dのメカニクだな…」と頷いた。

そして涼介も、リーダーとしてドライバーの事は把握しておきたい。

「で、お前の目から見た藤原は、最近どんな感じなんだ？」

その問いに、松本は目の前のグラスをクイと空にしてから、ポツリと語りだした。

何ていうか…藤原は、啓介さんとは正反対で、自分の感情をストレートに出すタイプじゃないですよ。内に秘めるタイプというか。ことに、自分自身に関しては多くを語らないタイプです。でも、俺には何となく伝わってくるんですよ。最近のあいつは、何か凄く辛い事があったんじゃないか…って。それを、必至に押し殺そうとしている感じですかね。

タイム的には問題ないんですが、運転にバラつきがあるというか。隣に乗っていると感じるんですよ。俺は、そのうち車も藤原も悲鳴を上げるんじゃないかと…そう思うと怖いんです。内面に溜め込んだものが爆発する前に、何とかしてやりたいとは思ってるんですが…」

思いもよらない松本の言葉に、史浩は目を丸くした。

そんなに深刻な状態なのか？藤原は…。なら、もっと早くに俺達に相談してくれてもよかったらどう？」

史浩にそう言われて、松本は困ったように口元を歪めると、答えた。

ええ。でも、確信があるわけじゃないんです。俺が、なんとなくそう感じただけで…。俺の思い過ぎかもしれませんが…」

神妙な面持ちで松本の話に耳を傾けていた涼介だが、少し考えてから、指導者らしい口ぶりで結論を述べた。

まあ…確かに、最近のあいつはボーっとしている時間が増えたよな。松本、引き続き藤原の様子を見てくれ。お前でなければ解らない事も多いだろうからな。もしあいつに話す気があるようなら、それとなく聞いて、相談に乗ってやってほしい。俺達よりは、いつも一緒にいるお前のほうが、藤原も話しやすいだろう」

「解りました」

拓海の話題がひと段落ついたところで、史浩は話題を変えた。

ところで涼介、お前こそ最近変だぞ。それとも、またあの時の事を思い出しているのか？」

「何のことだ」

しらばつくれたようなその様子に、史浩は溜息混じりに答えた。

「2年前の事だよ。お前、あれ以来、毎年この時期になると思い出すんだろ？ 啓介も心配してたよ。…あの時の事については、俺は今でも後悔しているんだ。俺が、お前に電話さえしなければ…」

そう、史浩が言い終るか終わらないかのうちに、涼介はその言葉を遮った。

止めよう、その話は。別に、電話が来ようと来まいと関係ない。俺は、彼女に振られた。ただ、それだけのことだ」

それだけ言つと、眉間のあたりを指で押さえた涼介は、

「少し酔った様だ。外の風に当たってくる」

そう言つて、店を出て行った。

その後姿を見送り、外へ出た事を確認すると、松本は史浩に尋ねた。涼介さんも、何かあったんですか？」

松本の問いに、史浩は深々と溜息をつく。ポツリとこぼした。

あいつには…2年位前、すごく好きな女が居たんだ」

「ええ…。でも、振られた…って言うてましたね。あの涼介さんが振られるなんて、ちよつと想像つかないですけど」

不思議そうな顔で酒を嘗める松本に、史浩は、少し間をおいて言った。振られた、と言っているのかどうかは解らないが…。出会ったその日に「目ぼれして、一晩一緒に過ごしたらいい。でも、その夜に2軍の連中が他のチームと揉め事を起こしてな。当然、リーダーである涼介の耳に入れておくべきだと思った俺は、すぐに連絡をとった。」

丁度その時、彼女は眠っていたらしいんだが、起こして説明しているだけの時間は無いと判断したんだろう。結局あいつは、彼女を起こさぬまま、ベッドサイドに先に帰る旨と自分の電話番号を記した書き置きを残した。彼女がどこから来たのかも解らないし、あまり持ち合わせがなさそうだったので、帰りの交通費も添えてな。でも…その後彼女からの連絡はなく、消息も途絶えた…」

一頻り話して喉が渴いたのか、追加の酒を注文すると、史浩は溜息をついた。

でも…探す事はできなかったんですか？名前くらいは知っているんでしょう？」

涼介の情報網を知っている松本は、すかさず史浩に尋ねた。

しかし、史浩はゆっくりと首を横に振った。

それがな、名前も知らないらしいんだ。悪友に騙されて合コンに付き合わされた先で出会ったらしいんだが、腹を立てて帰ろうと思っていたところに、急に彼女が入ってきて…。友人が彼女のことを紹介したらいいんだが、涼介のヤツ、目を奪われていて上の空だったらしい。でもまさか、聞いてなかったから、もう一度教えてくれ』とは、あいつの性格上なかなか言い出せなかったらしくて…結局、聞かず終いで別れてしまったんだな。ま、一緒に行った連中からも聞き出そうとしたんだが、どうやら

彼女の友達、学校も住所も偽っていたらしくて…探すのはちよつと困難なんだ」

そつ…だったんですか…」

松本も、ガツクリと項垂れると、掌の中のグラスを見つめた。

でも、初対面で、涼介さんがそこまで惚れる相手…って、ちよつと興味ありますよ。どんな女性だったんでしょうね…。だって、たった一晩過ごしただけなのに、涼介さんが2年も想い続けているなんて、ちよつと意外でしたよ」

そんな松本の台詞に、史浩はクスリと笑った。

そつでもないぜ。あいつは、あの容姿のせいで誤解されがちだけど、本当は、一度好きになったものに対しては結構一途でしつこいんだ。…車だってそつだろ？」

はあ、そう言われてみればそつですね…」

驚く松本に、もう完全に出来上がっている史浩が、さらに内緒話のように耳元で囁いた。

あと、ここだけの話だけどな…」

はい…？」

涼介が惚れたその女、藤原にとっても似てるらしいんだ」

え…つ、そつなんですか？」

ああ。だから、初めて会った時は、かなり吃驚したらしいよ」

「え…藤原に…」

確かに拓海は、まだ歳若いせいもあってか、男とも女とも取れないような中性的なイメージがある。もし女にしたら、結構イケるかもしれないな、とすら思う。しかし、残念ながら彼は男だ。

涼介のヤツ、彼女と似ている人を見つける度に、『姉妹はいないか』とか聞いて回ってるらしいんだ。…そつ言えば、先週のミーティングで集合し

た時、藤原にも聞いてたって、啓介が言っていたな。生憎、藤原は一人っ子だったようだが」

そうですか…」

そう言った瞬間、ふと松本の脳裏に引かかるものがあった。

…そういえば、藤原がおかしくなったのも、ちよつどその頃からだ。

彼女、見つかるといいですね」松本がそう呟けば、

そう願うよ。俺も、この時期のあいつを見ているのは、ちよつと辛いんだ」

そんな話をしていると、涼介が外から戻ってきた。

二人は慌てて話題を変えたが、胸の中には、何とも言えない重苦しさだけが残った…。

第七夜

夢を見た。

クーラーもない部屋の中。じっとりとした空気がベッドの上の拓海を包む。

そのどこか人肌を感じさせる熱さが、きつと拓海にあんな夢を見せた。

好きだよ』

二年前のあの時のように、優しく微笑み自分を見つめる涼介の姿。その細く長い指が自分の顎を捉え、甘噛みするようなキスを降らせる。

刺激に耐えられず、身動きする拓海の肌の上に涼介の指が滑る。

誰も触れたことのない肌を、涼介の指から伝わる熱が侵食し、拓海を涼介の色に染め上げる。

誰も入り込まなかった拓海の奥に、涼介が侵入し拓海の中に彼そのものを埋め込む。

伸ばした手の先に、熱い涼介の体があった。

背中に爪を立て、痛みにより滲んだ涙で自分に覆いかぶさる彼を見上げれば、涼介の肩が痛そうにしかめられた。

『ごめん』

謝る声に、背中に回した腕の力が緩んだ。痛みだけではない涙がまた滲み、拓海の心に針を突き立てる。

けれど。

酷いことをしてるよな。でも…』

ぐつとさらに進んでくる体に、拓海は甲高い声を上げる。

『好きなんだ』

緩んだ拓海の腕を取り、許しを請うようにその手の甲に口付け、自分の頬に当てる。ひたりと据えられたその目つきに、拓海の胸の中にたまらない彼の愛しさを生み出す。

涼介が拓海の腕を、また自分の背中に促した。そして、

『痛かったら、いくらでも爪を立てていい。俺を傷つけてくれて構わない』

幸せだった。

彼に包まれ、彼と言う存在に自分を粉々にされた。そして粉々になった自分を、彼がまた新たな形に組み上げていく。彼の望む通りに。

『だけど、俺を受け入れてくれ…』

涼介が望むなら、何でもしたいと思った。

どんなに痛くても我慢が出来た。

好きだったから。

好かれていると、思ったから。

けれど現実には悲しく、拓海の心を常に散り散りに破れさせる。

『恋人なんだってさ。忘れられないって言うてたから、別れたか何かしたんだろっけど…』

そいつと別れたのが、どうも夏みたいでさ。それから、アニキは夏になると思いつくのか、おかしくなるんだよ』

響いた啓介の声とともに、今まで愛しそうに自分を見つめていた涼介の目が凍る。

好きだ』と囁いていた唇が言葉を漏らす。

『違う』

そして縋る拓海の体を突き放し、あんなに熱を持っていた体が一気に冷たいものへと変わる。

間違えた。お前じゃなかった』

往生際悪く涼介の腕を掴む拓海の腕を乱暴に振りほどく。

そして拓海ではない方向を向いた涼介の顔が途端に華やかな笑みを浮かべた。

『…』

自分ではない女の名前を呼び、拓海を捨て去り嬉しそうに涼介が、綺麗な女の下へと駆け寄っていく。

涼介さん！』

拓海が彼の名を呼んだ。

けれど振り返った涼介の顔は、温かみのカケラもない冷たいものだった。

ちやんと金は払っただろう？あれだけでは足りなかったのか？』

そんなものはいらない。そう拓海が叫び返せば、涼介が嘲笑を浮かべ拓海を見る。

何か勘違いをしていないか？あんな時の言葉なんて、全部ウソに決まってるだろう。お前は身代わりにしか過ぎないんだ。それ以上を求められても困るな』

その言葉と同時に、拓海の体がボロボロと崩れ落ちる。

一度粉々にされ、涼介により組み上げられた体。その彼がいらないと言いつのなら、こんな体はいらない。

お前に好かれて、俺が喜ぶと思ったのか？分を弁えろよ。お前なんか遊びに決まってるだろう』

それでも諦められず、伸ばした指先が涼介に届く前に崩れていく。

そんな拓海を見て、涼介が侮蔑の笑みを浮かべながら背を向けた。

追いかけてようと踏み出した足の先から崩れていく。ガシャン、とまるでガラスが砕けるように足が壊れる。バランスを失い、拓海の体が地に倒れた。

腕を伸ばしそれでも這おうとするが、今度は腕もまた付け根から崩れていく。

拓海は涙を流した。

震える唇が、あの時は知らなかった彼の名前を紡ぐ。

『りよ、すけさ…りようすけさん…涼介さん…』

けれど拓海の声は届かない。

ねえ。あの子はもういいの？』

涼介の愛情に満ちた視線をいっぱいに受けた女が拓海を振り返り、涼介に言う。その顔がどんなものなのか、拓海には見えなかった。

けれど、自分よりは綺麗だという確信はあった。

ああ。構わないよ。あれはもういないんだ』

かつて拓海にしたように、涼介の手が彼女の髪に触れ微笑んだ。そしてその唇にキスをし、その肌に指を這わせる。

もう君がいるからね。身代わりなんて必要ないんだよ』

その瞬間、拓海の唇から絶叫が漏れた。

ハッと気付いた時には、灯りを煌々と着けたままベッドの上で眠る自分に気付いた。

体を起こしてみれば、まるでガラスになったように体がぎしんだ。

拓海は自分の手を見つめ、壊れていないことを確認し安堵した。

そして頬に手をやれば、そこは涙が滂沱の滴となって顔中を濡らしていた。

赤城でのミーティングが終わった後、すっかりそのまま眠ってしまい、悪夢を見てしまったらしい。

そんな悪夢を、あの事実を知った日からずっと見続けている。

満足に眠ることが出来ず、夢つつつを彷徨い、あの夢が現実なのか、幻なのかの判断も付かない。

どんなに、あのことを忘れようと思っても心が、体が裏切る。

目覚めている時は必死に自分を誤魔化せていたものが、夢の世界では本当の気持ちがあふれ出す。

もう一度涼介に抱かれない。

でも、それは二度と叶わない。

そんな希望と辛い現実を織り交ぜ、拓海の心を疲弊させる。

あのガラスのように崩れる自分は遠くない未来の拓海の姿だ。

それを分かっているながら、涼介の主催するチームから離れることもせず、ただ彼の姿を、声を聞きたいと言っただけで無理をして居続ける自分。

ドライバーとして望まれたのなら、せめてその期待にだけは答えたいと、そう思う。

涼介のためじゃない。

哀れな恋心を抱え続けたままの、愚かな自分のために。

ハア、と拓海は自嘲の溜息を零し、ベッドから足を下ろした。まだシャワーも浴びていない。寝汗でベタついた体が、あの悪夢の名残のようで気持ちが悪かった。

そして部屋を出ようとしたその瞬間、携帯の着信音が鳴った。

社会人になったことで初めて携帯を持った拓海はその使い方をまだよく知らない。

着信音は、着メロでもなく普通のベル音だ。

着信相手により音が変わえられる機能は何となく知っているが、そうしようにも興味も拓海にはあまり無い。

だから気付かなかった。

けれど拓海が、もしその電話の相手が誰なのかを予め知っていたなら、きっと彼女はそれを取らなかった。

拓海の悪夢の原因。

そして拓海を壊し続ける存在。

『もしもし。藤原？』

小さな機械の向こうから響く、耳に心地好い低音の声。二年前、耳元ですっと囁かれ続けたあの声だ。

『悪い、眠ってたか？』

夢とは違う。優しい声が機械の向こうから拓海に届く。愚かな拓海は、そんな彼の声音を聞いてまた勘違いをする。

自分は大事にされていると。

返事がない拓海に、戸惑ったような涼介の声が響いた。

藤原？大丈夫か？』

優しくしないで欲しい、そう拓海は思った。

けれどそれと同時に、優しくして欲しいと、そう願いもする。

『だ、い…じょうぶ、です』

藤原？声が変だが…』

『ね、寝てて、だから…』

『ああ、悪い。やっぱり眠ってたか。起こして悪かったな』

『え、そんな事は…。それより、涼介さん、何か用事でも？』

大丈夫だろうか。自分はちゃんと声を出せているだろうか。震えているのがバレないだろうか。

『いや、大したことじゃないんだが…その…藤原は何か悩みでもあるのか？』

『え？』

ぞう見えるって話を今聞いてな。つい、気になって電話してしまったんだが…。すまない、何をやってるんだ、俺は…思ったより酒が回ってるみたいだな』

拓海に語りかけるといふより、最後は独り言のようになってる涼介の声に、常に完璧な彼の、人間くさい面を垣間見たようで、拓海の中に喜びが生まれる。

そして改めて実感した。

——この人が好きだ。

初めて会ったあの日から。
二年経った今でも変わらず。

どんなに傷つけられても、裏切られても彼が好き。

『藤原…もしかして泣いてるのか?』

気遣うような涼介の声に、初めて拓海は泣いている自分を自覚した。
嗚咽が漏れ出ていたらしい。

『藤原。頼む。俺を頼ってくれ。…俺じゃ無理なのか?俺では、お前の支えにはなれないのか?』

哀願するような涼介の声が聞こえる。

その声に、生まれたのは喜びではなく怒りだった。

ぎゅっと携帯を握る手に力がこもった。

涙は止まらない。ただ、怒りが嗚咽を止めた。そして言葉を放たせ
る。

『嘘吐き』

『え?』

『もう、やなんだ、遊ばれるの』

『藤原?何を言ってるんだ?』

戸惑った涼介の声にまた怒りが増した。

あんたにとっちゃ、よくあることだったのかも知れないけど…オレに
は…』

涼介にとっては、何でもなかったのだと知っている。けれど自分
にはそうではなかった。

藤原?いつたい何を…』

名前なんて呼ぶなよ…もう、嫌だ、騙されたくない…』

『騙す?何を言いたいんだ、ふじわ…』

『うるさい!もうオレに構うなよ!あんたなんか…』

嫌いだ!と言いたかった言葉が続かない。

藤原?』

あんたなんか…』

たとえ嘘でも、言えない。自分の気持ちを誤魔化すことは。

オレは……』

このままでは自分が壊れる。

いつか遠くない未来に。

ならば、今壊してもきつと一緒にだ。

そう、拓海は混乱する頭で思った。そして後で気付いたなら後悔する
言葉を発した。

『あんたが…好きだ…』

『ふじわ…っ!』

どんな言葉が返ってくるのか、拓海には分かった。

だから涼介の返事も待たず携帯を切った。電源から落とし、携帯をベ
ッドの上に放り投げる。

そして力の抜けた体はズルズルと滑り落ちるように床に崩れ、そして
また新たな涙を流させた。

『ハハ、言っちゃった…もう、終わりかあ…』

衝動から出た言葉だが、紛れもない二年間の拓海の真実だ。

もうDにも戻れない。

愚かで哀れな自分の恋の幕引き。

最後の最後まで、愚かで哀れなままだった。

拓海はひたすら、そんな自分に対し涙を流した。

～第八夜～

突然切られた携帯電話からは、冷たく無機質な音が続いていた。

涼介は、それをゆっくり耳から離すと、呆然とディスプレイを見つめて呟いた。

「どういつ……ことだ？」

いくら考えても解らなかった。

思い直してすぐにリダイヤルしたが、もう、電話は繋がらなかった。

酒などとうに醒めているのに、頭が上手く回転しない。

そんな自分をもどかしく感じながらも、涼介は先程の拓海の科白を思い出していた。

「嘔吐き——」

「もう、やなんだ、遊ばれるの」

「あんたにとつちや、よくあることだったのかも知れないけど……オレには——」

「『もう、嫌だ、騙されたくない……』」

……まったく予期しないことだった。

藤原拓海の悩みの根源が、他でもない自分だったなんて……

松本にその役割を託したものの、彼をドライバーとして招き入れた責任者の立場上、放っておくわけにもいかず……少し悩みの相談に乗るつもりが、思わぬ地雷を踏んでしまった涼介は、少なからずショックを受けた。

どうやら自分は、知らぬ間に彼を傷つけていたらしい。

……しかし、幾ら考えてみても、その理由は見当たらなかった。

今までの彼は、自分に尊敬するような憧れの眼差しを向け、話しかければ赤面して俯くような……そんな青年だった。

確かに最近硬さも見られたが、涼介に対し、こんな感情を爆発させるような事はなかった。

ふと涼介は、彼の最後の科白を思い出した。

「『あんたが……好きだ……』」

記憶の隅でその言葉が響いた瞬間、涼介は思わず携帯を取り落としていた。

開かれたままフローリングの床に吸い込まれたソレは、壊れたような音を響かせた後、クルクルと回転して止まった。

「だから……か？」

電話をした当初は、彼はいつもの彼だった。しかし、俺を頼ってくれ」と言った途端に、彼の態度は豹変した。

そう思えば、確かに頷けた。誰でも、悩みの原因を作った者にそんな事を言われれば、少なからず気分を害するだろう。

しかし、その前に彼が言った科白には、やはり謎が多かった。涼介には、心当たりの無い事ばかりなのだ。

「一度、ゆっくり話し合う必要があるな……」

そう結論付けたものの、謂れの無い怒りを突然ぶつけられた涼介は、その夜、ついに眠ることが出来なかった——。

一方、拓海もまた眠れぬ夜を過ごしていた。

これでもう、彼の傍に居ることさえできないのだと…後悔の念に苛まれる傍ら、逆に言つてよかったのだと、心のどこかで肯定する自分もいた。

長年の報われぬ恋に、自ら幕を引いたつもりだった。まるで、無言劇のようだった2年間に。

だのにまだ、心は確かに彼を想い続けている。

未だ、血を流し続ける傷心…

でも、何のことはない。このまま、ただひたすら風化するのを待てばいい。

今までのように。昔、母を亡くした時のように――。

大切なものを失くす痛みを、拓海はよく知っている。時間はかかるけれど、いつの日か癒える時がくる事も。

苦しいのは今だけで、そのうち、切ない想い出に変わる事も。

これから出会う沢山の人々が、沢山の出来事が…いずれそれらを覆い隠してくれるだろう。

苦しいのは――今だけ。そう、自分自身に言い聞かせる。

後戻りの出来ない崖。ぶち立った自分を、言うことは言ったのだという、開き直りにも似た脆い精神が支える。何も言わなければ、このまま彼を見つめ続ける事だけは出来たのではないかと、悩み、後悔する自分と――こんな状態を続けて心が壊れてしまう前に、2年間の真実を告げ、未練に決別した自分――。

でも、いったい何が変わっただろう。

彼を愛する気持ちと、苦しさをそのままに…なんら変わりない、ボロボロの自分が、居るだけだ。

本当は、忘れる術なんて知らない。強がったって、どうにもならない。新たな悪夢に魘される日々が続く、拓海は確実に疲れていった。そんな、ある日――。

拓海、客だ」

連日の寝不足からくる眩暈に苛まれ、とうとう仕事を休んだ拓海。

階下から父の声が聞こえ、拓海は、壁に手を着きながら、のろのろと階段を下りた。青白い顔を店先に覗かせてみれば、そこに立っていた人物を見て、拓海は驚いたように目を見開いた。

「松本さん」

やあ。会社に電話をしたら休みだつて言うから来てみたんだけど…酷い顔色だな。悪い、日を改めるよ」

「え、大丈夫ですよ。何か用があつたんでしょう？上がつてください、松本さん」

松本を自室に通すと、拓海は「ちょっと待って下さい。お茶でも淹れてきます」と部屋を出ようとしたが、「いいから、横にでもなつてろよ。具合が悪かつたんだろ？」と、松本に制止された。

仕方なくベッドに腰掛けると、

すみません…わざわざ家まで来てもらったのに。でも、どうしたんですか？」と松本に尋ねた。

松本は、都合が悪そうに後ろ頭を掻きあげながら、「いや、すまない。大した用事じゃなかつたんだけど…」

と苦笑すると、拓海を見て心配そうに顔を歪ませた。生気を無くした様な青白い肌が、痛々しくて仕方なかつた。そんな松本の視線に気付いた拓海は、気まずそうに目を逸らした。

藤原…お前、最近何か悩んでいる事があるんじゃないのか？そんなに体を壊すほど、思い悩んでいる事が…。俺なんかじゃ力になれないかもしれないが、言って楽になることだってあるだろう？話してくれないか、何があったのか」

松本が涼介と同じような事を聞くので、恐らく涼介に進言したのは松本だろう。

その、決して追い詰めるような風でも無い優しい問いかけに、拓海は思わず涙が出そうになった。でも、込み上げたものをなんとか飲み込むと、軽く笑顔を作って答えた。

別に…俺、悩みなんかありませんよ。最近ちょっとシフトがきつかったんで、疲れが出ただけです。すみません…何か、心配かけちゃって」

明らかにぎこちない笑顔。恐らく彼は、いつもこうやって自分の中に全てを閉じ込めて来たに違いない。そして、これからもそうするだろう。でも、それではダメだ。何も変わらない…と、松本の頭の中で、警報が鳴る。

決して、言うまいと思っていた。

これが吉と出るか凶と出るかは、松本にとっても賭けだった。

でも、全てを打ち明けてもらうには、この事を明かしてしまった方が、拓海の本心を聞けるのではないかと…そう思った。

もしかしたら、開き直られてしまうかもしれない。あるいは、誤魔化してはぐらかされてしまうか…。

でも、松本は、拓海の一歩の理解者になりたかった。

ずっと、彼と、彼の操るマシンを見ているうちに…：自分の中に、ある感情が湧きつつあることに、松本は気付いていた。

松本は、苦しそうに押し黙ったのち、静かに口を開いた。

藤原…、一つだけ教えてくれ。俺の勘違いであっていい。お前が最近思い悩んでいるのは、お前が“女”だということと、何か関係があるのか？」

そう言った瞬間、拓海が弾かれたように顔を上げた。

咄嗟に何か言おうとしたが、言葉がみつからない。笑って誤魔化そうと思ったのに、拓海はそれに失敗した。

何…言ってますか…」

いつものように、笑って冗談にしていたかった。でも、顔の筋肉が言うことを聞かない。一生懸命笑顔を作ったはずの顔は、今にも泣き出しそうに歪んだだけだった。

いつかは、こんな日がくるかも…と、思っていた。

自分とハチロクを毎日見ている松本には、いつか誤魔化しが効かなくなるかもしれない。でも、どうしても聞かすにはいられなかった。震える声で、拓海は松本に問うた。

ぞ…して…いつから？」

少し前から…。でも、確信したのはついさっきだ」

拓海をなるべく刺激しないように、穏やかな口調で松本は答えた。

俺は、お前の親父さんとは面識が無かったから、さっき来た時にこう聞いたんだ。 拓海さんの友人ですが、“彼女”は“ご在宅ですか”…と。

親父さんは、何も否定しなかった。カマかけるような真似をして、本当に悪かったと思ってる。でも、それを知った上でなければ、お前の本音を聞けないと思ったんだ。なぜなら俺は、漠然とだけど、その原因に心当たりがあるからだ。…藤原、お前、Dに入るずっと以前に、涼介さんと何かあったんじゃないのか？それが原因で、今苦しんでいるんじゃないのか？」

心臓を…打ち抜かれたような気がした。

なぜ…？どこでバレた？

なぜこの人は、ここまで知っているのか…？

誤魔化すことも否定することも忘れた表情は、固く強張るばかりだった。

あ……

何か言おうと思うのに、何と言っているのか解らない。もう、誤魔化せない。自分が女だということも、涼介に対する気持ちも…この人はもう、すべてを知っている。体が、自然と後退る。この現実から、逃れようとするかのよう。

その時、拓海の目の奥を凝視していた松本の目が、ふっ…と和らいだ。

藤原…俺は、お前を追いつめたいんじゃない。お前が一人で悩んでいるのが、俺には辛かったんだ。だって…何の為にチームメイトなんだ？極限のプレッシャーと戦うドライバーをサポートするはずの俺が、何の役にも立てないなんて、悔しいじゃないか。これから先、もっと手ごわい相手とバトルしなきゃならないんだ。なるべく気持ちを軽くして、バトルに集中する…それが、お前らドライバーの義務だ。そして、少しでもドライバーのコンディショニングを把握して走りやすくしてやるのが、俺達サポート部隊の役目だ。言ってみるよ、何でもいいから。何でも聞くから…

まるで、どこぞの熱血教師が吐く様な台詞を口にしてしまった自分に、松本は心の中で苦笑した。

でも、他にどうしたら彼女の心を開かせる事が出来たというのか…。もつこれ以上、自分の中に全てを閉じ込め、自己処理するような事だけはさせたくなかった。だから、一人でも理解し、痛みを分かち合える人間がいたら…。その“居場所”に、自分はなりたかった。

「…です」

え…？

もう…いいんです！俺はもう、プロジェクトを抜けます。誰か別の人を探してください！

何を言っただ？藤原！そんなこと、出来るわけがないだろう？お前の代わりなんて…

でも…っ、もうダメなんです。行けるワケないでしょう！？俺、言っちゃったんです…

切れた息の間に、少しの戸惑いがあった。松本は、直感的にその続きを聞きたくないと思った。

言っちゃったんだ…涼介さんに…っ！『アンタが好きだ』…って！

「……」

暫らくの間、松本は絶句していた。でも拓海は、肩で息をしながらも一気に捲くし立てた。

そんな事言ったのに、涼介さんの前に顔を出せるワケないでしょう？

俺はもう、彼の拒絶の言葉なんて聞きたくない…！優しい言葉で惑わされるのも、もう御免なんです…これ以上…もう…っ

いつもとは全く違う激しい様子の拓海に、松本は一瞬息を呑んだ。しかし、思いなおすと、宥める様に静かに語りかけた。

どうして、拒絶されると決め付けるんだ？男なら別だが、お前が女だというなら、何の問題もないじゃないか…。お前のことは、涼介さんも嫌いじゃないと思うよ。むしろ、気に掛けていると思うんだ。Dに入る前に、お前と涼介さんの間に何があったのか、詳しい事は知らない。でも、もしかしたらその…お前と涼介さんは付き合ってたんじゃないのか？ もつとも、今のお前がその時の相手だったとは、涼介さんは気付いてないみたいだけど…

そこまで知られているのなら、もう隠すことなど何も無い。否定することすら、疲れてしまった。

壊れたように、居直るように…拓海は、今まで胸の奥に溜まっていたドス黒い感情を吐き出した。

付き合ってるって？気に掛けてるって！？そんなハズない！そんなんだったら、金なんて置いていくワケないでしょう？俺は、遊ばれただけだったんだ！好きだったのに…本当に好きだったのに、涼介さんにとっては、昔の彼女を忘れるための、ただの遊び道具に過ぎなかったんだ！

啓介さんだって言ってた…涼介さんが、俺に似た人を探してるって…で忘れられない恋人なんだって。俺は、身代わりにされたただけだったんだ。たった一晚、彼女を忘れるための…。ただ、それだけの…ッ」

もうやめるんだ、藤原！」

松本が制止するのと、ほぼ同時…拓海の体が、ガクリと傾いた。息が、浅くて早い。——過呼吸を起こしていた。

松本が一通りの処置をして拓海の家を出る頃には、もう夕方になっていた。拓海の父親に深々と頭を下げ、店を後にした松本は、路地の向こうによく見知った人影を見つけた。

…涼介だった。

松本！」

松本の姿を見つけた涼介が、軽く手を上げて駆け寄ってくる。

藤原に…：会いに来たんだろう？何か話は聞けたのか」

松本は、軽く目を逸らすと、「え…」とだけ答えた。

拓海があんな事になっているのに、何も知らない涼介に腹が立った。

…解っている。涼介が、本当に何も知らないのだということも。彼に怒りを感じるのには、筋違いだということも。

でも、彼に対する苛立ちを抑えることが出来ない。なぜ、こうも冷静でいられるのか。自分が原因だと知ったら、少しはうろたえてくれるのだろうか？

涼介さんも…藤原に会いに？」

ああ。数日前の電話で、ちよつと気になることを言っていたものだからな…。直に会って話をしようと思ったんだ。今日になって、やっと体が空いた。…藤原は、家に居るんだろう？」

会って欲しくない。これ以上、彼女を追い詰めることだけはして欲しくない。そう思ってた言葉は、搾り出すような声になっていた。

「涼介さんは、会わない方がいいと思いますよ」

視線を逸らしたまま呟く松本に、涼介は何かを感じ取った。

やはり…俺が原因なのか？本当は、藤原と話をしたんだろう？

俺には、聞く権利がないということか。…そうだろうな。俺は、あいつの気持ちに依ってやる事は出来ないからな…」

その瞬間、松本が顔を上げた。押し殺した怒りの中で、彼は静かに口を開いた。

涼介さん。あなたは、過去の“彼女”の残像に、しがみ付いているだけじゃありませんか？いつものあなたに戻って、もっと冷静に現実を受け入れたなら、おのずと見えてくるはずですよ。彼女が何を想い、何に嘆いてあなたの前から姿を消したのか…」

「どっという意味だ？」

まるで謎々のような松本の言葉に、涼介の眼光が厳しくなる。そして、彼らしくもなく、感情を顕わにさせた。

お前に…何が解ると？」

言葉の底に、はつきりとした怒気が伺えた。押し殺したような、ワントーン低いその声音に。

そんな涼介に対し、松本は静かな笑みをこぼした。

嘲るでも蔑むでもないその笑みは、苛立ちに震える涼介の心を揺らした。自分が見失っている何か…それを、この男は知っているのだろうか？

俺の口からは、これ以上言えません…失礼します」

松本は、軽く会釈をすると、涼介の脇を通り過ぎた。

しかし涼介は、咄嗟に振り返って松本の腕を掴んだ。

「お前は…何を知っているんだ？」

それは、涼介さんがご自分で気付かなければいけない事です。藤原を生かすも殺すも、あなた次第ですよ。それを、忘れないでいて下さい」

松本は、静かに涼介の手を外すと、路地の向こうに消えた。

一方、ここ数日の短い間に、拓海と松本…二人から謂れの無い怒りをぶつけられた涼介は、果然とその場に立ち尽くしていた。

もう、何が何だかわけが解らなかった――。

第九夜

涙はいつになったら枯れるのだろうか？

母親が亡くなったあの日に、尽きたと思っていた涙は、涼介と出会ってからまた壊れた蛇口のように常に溢れさせる。

何度も夢に見て、そして涙を流す。

泣いた後はいつも自己嫌悪に襲われる。この世から、消えてしまいたいほどの絶望感に、暴れだしたくなり、そんな感情のままに朝の配達に出かければ、いつも父親からは叱責を受けた。

車に八つ当たりするんじゃないか？

そんな時は、いつも拓海にさせる配達を文太は必ず自分でする。

泣き腫らした目を見るまでもなく、文太には拓海の調子など、ハチロクを見るように分かっているらしい。

だが今回は、泣いたと言っのにいつもの感覚がない。

やけにスッキリした気分が広がっている。

松本さんのおかげかな…」

ずっと秘めていた秘密と感情。誰にも言えず、淀んでいたものを吐き出すことで、悲しみからの出口を見つけたような気がした。

そして同時に、さんざん絡み暴れた記憶も同時に蘇る。

恥ずかしさと申し訳なさに、慌てて松本に電話をかけた。

その電話の向こうで、必死に謝る拓海を宥めながら 大丈夫だよ。それより藤原こそ平気か？」と氣遣われた。

けれど不意に沈黙し、松本は言った。

藤原』

はい。」

明日の赤城でのプラクティス…出れる?』

「……」

行き辛い?』

「どんな顔をして行けばいいのか…まだ…」

また沈黙が広がる。

けれどすぐに、松本がまた拓海の名を呼んだ。

藤原』

その声音に、ある種の決意を含ませて。

『こうすることで、どうなるのか正直俺には分からない。でも、今よりは確実に変わるとは思う。』

ただ、それが良い方に転べばいいが、最悪、破局しか訪れない結果になるかも知れない。

それでも良ければ、この件は俺に任せてくれないか?』

松本、さん?」

突然の彼の言葉に、拓海には話が見えない。

彼が真剣なのぐらいいは分かる。

ただ、何をしたいのか…。

けれどすぐにそれは分かった。

藤原』

はい』

俺と、付き合わないか?』

その言葉を把握するのに、拓海はかなりの時間を必要とした。

雑多なエキゾーストが聳る赤城の峠。

その中でも一際激しくFD咆哮が響き、他との格を見せ付ける。

FDの調子が良い。

だがハチロクは…。

涼介は溜息とともに、後方にいた史裕を振り返った。

史裕。藤原はまだ来てないのか?」

ああ。そっぴや、松本もまだだな」

松本も、か……」

その名前に、涼介は苦い感情が蘇る。

結局、涼介には松本が暗示していたことも、そして拓海言葉も理解できなかった。

全てがバズルのようにバラバラで、そして涼介を悩ませる。

再度、深い溜息を吐いた瞬間、FDの音に紛れ、間違えようのないハチロクのエキゾーストが聞こえてきた。

その音に、涼介だけでなく史裕も気付く。

藤原が来たみたいだな」

その瞬間、涼介の体に緊張が走った。

どんな顔をすれば良いのか、分からないのは涼介の方だ。

拓海の事は嫌いではない。けれど、二年前の彼女の存在は忘れがたく、また性別は違えど似ている拓海に彼女を映して見ていることは確かだ。

このままなし崩しに拓海の思いを受け入れてしまえば、必ずいつか後悔する自分を知っている。

彼女を好きはずなのに、拓海を身代わりにしていると言う欺瞞に苛まれ。

それは拓海にも、そして自分にも良くない結果しか生み出さない。

だから非情と思うが、同性であると言う問題を抜きにしても、涼介

には拓海を拒絶するしか出来ない。

『あんたが…好きだ…』

あの言葉に対する返事を、拓海にしなければならない。

今まで数多くの女、また男にでさえあつた事だ。

告白され、断る。

今回もまた同じ事を繰り返すだけ。

そう思いながらも、どこか躊躇し、また重暗い気分になっていくのを涼介は感じていた。

あの彼女に似た顔を、涙で曇らせたくない。

そう思ってしまうのは涼介のエゴだ。

だが、事態は涼介が思うほど単純では無かった。

現れたハチロク。

もちろん運転席から降りたのは拓海だ。意外と元気そうな姿に、涼介に安堵が生まれる。

けれど助手席から降りてきた人物を見た瞬間に、涼介の顔は強張った。
『……松本？』

降りてきた松本が、当たり前のように拓海の傍らに立ち、そして拓海に向かい微笑みかける。

そんな松本に、拓海もまた遠慮がちではあるが笑みを返す。

その瞬間に、焼け付いた感情を何と呼ぶのかを涼介は知らない。

ただ、火がついたように熱く、苦く、そして腹ただしい。

そしてそんな火のような涼介の視線に気付いた松本が、涼介に対し優越感に満ちた笑みを浮かべながら、さりげなくその視線から拓海を庇

うように肩を抱き、拓海を隠した。

ギリ、と奥歯を噛み締める。

あれ？藤原と松本は一緒に来たのか？へえ…ずいぶん仲良くなったみたいだな。藤原の元気がないって話だったけど、松本が何か解決してやったのか？

涼介、お前、何か聞いて……涼介？』

『え、…あ、ああ、いや、別に』

慌てて平静を装うが、けれど強張りには消えない。

おつしたんだ、ぼうつとして？ほら、しっかりしろよ、お前が頼りなんだから』

バンと背中を叩かれ、その痛み顔に顔を歪めながらもぎこちない笑みを浮かべる。

知らず握り締めていた手のひら。

拳を開き、そつと見てみれば、そこにはクッキリと爪の跡が浮かび血が滲んでいた。

俺と、付き合わないか？』

その言葉に拓海は凍りついた。

あの…それって…』

『…と言っても、演技だけだね。涼介さんを刺激するためもあるけど、何より藤原は俺と付き合っていることにしたほうが、涼介さんの前に顔を出しやすいかと思ってるね』

で、それは…』

涼介ではなく松本を好きな振りをする？

それは嘘をついているようで後ろめたい。

けれど、断られると分かっている告白をし、また最悪Dを辞めさせられるかも知れない今の状況で、松本と一緒にいることで涼介に あれは勘違いだったのか」と思わせることは可能だろう。

藤原はこのまま走りたいんだろう？ 最近の藤原は本当に走ることを楽しんでているのが、ハチロクを見ていてよく分かっていたから、俺としてもこのままDで走って行って欲しいと思ってるんだ』

松本さん…」

もしも自分に兄がいたら、こんな感じだろうかと拓海は考えた。

父親のようにハチロクと自分を、いや父親よりも優しくサポートする彼に、以前からそんな感情は抱いていたのだが、醜態を見られたことで益々その気持ちは強まった。そして松本に対する全面的な信頼も。

だから。

ありがとうございます、松本さん」

拓海は頷いた。

俺で、良ければ…その、演技ですけど、付き合ってください」

拓海は、電話の向こうで松本が切なく苦笑いを浮かべたのを知らない。

『俺は…本気だけだな…』

そう、切れた電話の向こうで呟いたことも。

第十夜

チリチリと、胸の奥で燃えるものがある。

普段と変わらず、さり気なくブラックティスをこなそうとすればするほどー 視界の端で微笑み合う二人が、気になって仕方が無かった。

でも、これでよかった筈だ。

どちらにしても自分は、彼の気持ちに応えてやることはできないのだから。彼の想いを退ける事で、悲しい顔をさせるくらいなら、どんな形でも、幸せになってもらった方が良い。

—だから、これでよかったのだ。

よかった…筈なのに—。

なぜ、こんなにも醜い感情が胸の中に湧き上がってくるのだろうか。

今の自分には、祝福ではなくむしろ、二人を責める様な、呪いのような言葉しか浮かんでこない。

俺の事を好きだと言っておいて、もう他の男に心変わりか…随分と軽いんだな』

藤原の件で俺を責めたのは、お前自身が藤原の事を好きだったからかなら、勝手にすればいいだろう？ 俺を巻き込むな！』

…違う。そんな事を言いたいんじゃない。

解っている。これは、子供染みた嫉妬と同類のものと。

自分に、悪戯に謎掛けのような試練を与えておきながら、何事も無かったかのように幸せそうに微笑み合う二人が憎くて…。まるで、同じ秘密を共有した彼等から、自分だけが取り残されたような疎外感と、彼の興味が、自分から逸れてしまう事に対する寂しさと恐怖を感じていた。

そして何より、彼に誇示したいと切望する自身がいる。

松本より、俺の方が優れているぞ」と。

…お笑いだ。

このモヤモヤとした胸の内を自己分析してみた涼介は、そのあまりにちっぽけなプライドとエゴに満ちた感情に苦笑した。

と同時に、ふと、自分の気持ちとここまで正直に向き合ったのは、随分と久しぶりである事に気付く。

ずっと背を向けてきた、この感情と。

彼女』とよく似た面影を持つ『彼』を、あの夜初めて見た。

最初は、『彼女』だと信じて疑わなかった。

偽り続けた自分自身を曝け出し、初めてその激情をぶつけた、あの夏の…一夜だけ愛を交わし、その後二度と会うことは叶わなかった、あの時の少女だと。

意志の強そうな眼差しも、柔らかそうな唇も。あの夜と、何一つ変わってはいなかった。…バツサリと短く切られた、薄茶の髪以外は。

泣き出しそうになる自分を、必至に堪えた。

やっと、見つけた。…そう、思っただけ。

『彼』は、『彼女』ではなかった。

藤原拓海」という、一人の男だった。

弟が惨敗したという相手…『秋名のハチロク』。

彼が男だと知ってもなお、どこかで諦め切れない自分がいた。しかし、一縷の望みに縋るように、全力で挑んだ戦いに自らが敗れたとき、その願いは脆くも崩れ去り…今度こそ、認めざるを得なかった。

これまで培ってきた知識、技術、自信…それらを一瞬にして覆してしまった人間が、あの時の少女であるはずがない…と。

そんな現実を突きつけられてもなお、どこかで彼と繋がっていたい…そう思った。自分の傍に…目の届くところに、彼を置いておきたい…と。

…解っていた。それが、どんなことなのか。何を意味するのか。

でも、心のどこかで大丈夫だと思っていた。彼が、男である限り。

彼を視界に捉える度に、密かに感じる動悸を遣り過しては、自身に言い聞かせてきたのだ。—呪文のように。

決して彼女の身代わりにはするつもりは無い、と。恋愛感情を抱く事は、皆無だと…。そして先日、彼に気持ちを打ち明けられた時でさえ、その暗示は効いていたはずだ。

それが、どうだろう。

今、松本の挑発的な視線と態度を目の当たりにした自分は、あっさりと白旗を揚げるのかとくく降参し、松本に対し、確かな嫉妬と焦りを感じている。

—カレラ、ダレモワタシタクナイ—

ふと、人の気配がして我に返ると、目の前には拓海が立っていた。

涼介は、動揺を隠すのに精一杯だった。
あの日の電話の激しさを感じさせないほど、拓海はいつもの拓海だった。少し俯いて…暗くてよく見えないが、きつと頬をほんのりと紅潮させている。

あの…、涼介さん…」

「…なんだ、藤原」

心の動揺が表情に表れない様に、涼介は拓海と向き合った。

拓海は、一瞬だけ涼介の顔を見たが、すぐに目を伏せて俯いた。

あの…つ、先日は、折角心配して電話してくれたのに、俺、失礼な事ばかり言つてすみませんでした。その…俺、夢見て寝ぼけてて。だから、忘れてください。俺の言つたコト…。変なことばっか言つちゃつて…その、怒つてます…よね？」

そう言つて、チラ…と涼介の顔色を伺うと、その顔には穏やかな笑みが浮かんでいた。

「いや。何にしても、元気になったみたいでよかったよ。エースが不調だと、俺も他の皆も心配だからな。また何か悩みでもできたら、何でも松本に相談するといい。あいつが、このチームで最もお前の身近にいる存在だからな…」

そう言つて、拓海の肩をポンと叩いた涼介は、その顔が、一瞬悲しそうに歪んだことに気付かなかった。

寝ぼけてた…か…」

煙草に火をつけて深く吸い込むと、同じように深く吐き出す。

モヤモヤとした紫煙と共に出てきたものは、自己嫌悪―。

精一杯平静と自尊心を保って放つたつもりの科白が、負け犬の遠吠えのごとく、苦く喉の奥で渦巻いた。

たつた今確信した想いも、真実の望みも…

彼の云つた言葉の前に、全て無効化した。

肩透かしをくらつたかのような虚しさが吐かせた、取り繕うような科白…。いや、もしかしたら彼が目の前に立つた時点で、長い間習慣化してしまつた暗示に、勝手に陥つていただけなのかもしれない。

カレハオトコダ、ナモカンジテハイケナイ』―と。

ねつとりと纏わりつくコールタールのような、澱んだ夜の熱気とは裏腹に…涼介は、自分の心が薄つすらと冷えていくのを感じていた。

一方、俺に『ではなく、松本に相談するといひ』といわれた事で、拓海は、どこか涼介に突き放されたような寂しさを感じた。少し暗い面持ちで松本の待つ駐車場の一角に戻つた拓海は、涼介からは死角となるハチロクの影に、ヘナヘナと座り込んだ。そして、車体に両手を着くと、そこに額を擦り付けて深い溜息を吐く。

どうだ…上手くいったか？」

一部始終を見ていただらう松本は、笑いながら拓海の顔を覗き込んだ。拓海は小さく首を振ると、はあ…よくわかりません』とだけ答えた。

二人の会話が聞こえていた訳ではないが、明らかに曇つたその表情から何かを感じ取つた松本は、拓海の肩をポンと叩いた。

でも、寝ぼけて言つた事だとは信じてくれたんだろう？ 少なくとも、

“男”に好きだと言われるよりは、そっちの方が信憑性があるからな……”
おどけてみせる松本に、拓海は、頬を膨らませて拳を振り上げると、
もう！という意味ですか！と、食ってかかった。

じゃれ合う二人の姿は、暫くして他のメンバーの目にも留まった。初めは少し吃驚する様に見ていた面々も、拓海の打ち解けた様子に、次第に微笑ましい表情を見せた。

——ただ一人の男を除いては——。

へえ。あいつ、いい顔するようになってきたじゃん。この間までは、なんか元氣ねえなと思ってただけど……な、アニキもそう思わねえ？」

ポケットに両手をつ突っ込んだ啓介が、啞えタバコで歩いてきて言った。

「そうだな」

涼介が半分以上の空で返事をする、傍らで遠征スケジュールの確認をしていた史浩も顔を上げた。

うんうん。あの様子を見ると、やはり松本が何とかしてくれたみたいだな。よかったな、涼介」

「ああ……」

なんとかしなきゃならないのは、もう一人いるんだがな……」

明らかに顔色を失っている涼介を横目で捉えながら、史浩は小さく溜息をついた。

第十二夜

松本には確認する事があった。

それは、彼が得た涼介からの情報と、そして拓海の情報と一致しているかと言ったこと。

涼介さんと初めて会ったのは？」

予想はしている。だがまだ確信ではない。

「二年前の……今頃です」

と言ったことは……夏？」

「……はい」

やはり、と言った気持ちは強かった。と、同時に、完璧に絶たれた望みのない状況に、痛む胸を押し殺す。

その時の状況を聞いていいか？」

え、と……」

松本の予想が正しければ、始まりの台詞は連れていかれた合コンの場で……」。

違っていて欲しい。だが、拓海の口からは予想と同じ言葉が始まる。

連れていかれた合コンで会って……あ、その時は全然気付かなかったんですけど、怒って飛び出した後に知り合いに絡まれて、それを涼介さんが助けてくれたんです」

頬を染める拓海の姿に、彼女の恋心がどれだけのものかを知る。

ふうん。まるで王子さまみたいだな」

揶揄する松本の言葉に、けれど拓海は悲しそうな笑みを浮かべる。

「ですね」

そして小さな溜息。

だから、好きになってもおかしくないですね」

予想は確信に変わった。

そして彼らの、誤解の全てを知る。

だが。

敢えて二人にその事を伝えない。

ほんの少しでも良い。

彼女に触れる権利を、自分にも与えて欲しかった。

涼介だけではない。

自分もまた、このダイヤの原石のように眩い彼女に、どうしようもなく惹かれていたのだから。

記憶と現実が交錯する。

あの二年前の夏の日から、何度となく涼介は夢を見る。

たった一度きりの、彼女の全てを己のものにしたあの日の夢を。

夢の中で、涼介は彼女の体を抱きしめる。

史裕の電話もかからず、彼女の傍を離れることなく、朝までずっと。

彼女が目覚めるまで。

そして寝惚け眼の彼女が、うつすら瞳を開き、自分を見つめる。

その時に、これ以上ないくらいの優しい笑みを彼女の瞳に映す。

『おはよう』

と。

そして恥ずかしがり、布団の中に顔を隠そうとする彼女を許さず、無理やり顎を掴んでキスを落とす。

隠さないで。顔が見たいんだ』

そう囁くと、彼女は困った顔をしながら、そろそろと布団を自分の上

から剥いでいく。

あの夜に見て、そして触れた真つ白で柔らかな肌が涼介の前に晒される。

羞恥にうつすらピンク色に染まったその肌の感触は、滑らかな絹のような心地でいながら、汗ばむと手のひらに吸い付き、離れるのが惜しいくらいの手触りを与える。

『あんまり…見ないで…』

真つ赤な頬をしながら、それに負けなくらいに赤く色付いた唇が細かい声を上げる。

涼介は微笑んだ。そして同時に、たまらない艶を見せる彼女の姿にゴクリと唾を飲み込む。

『…綺麗だよ。眩暈がするくらい』

肩から、ゆつくりと手を滑らし、なだらかな隆起を見せる胸へと向かう。

けれどすぐに違和感に気付く。

胸が小さい。

そう表現できないくらいに、その胸が平らであることに。

顔を上げ、見下ろす彼女の顔を見れば、真つ白なシーツの上に放射状に広がっていたセミロングの髪ではないショートになった彼女がいる。

いや…彼女ではない。

これは…彼だ。

『好き…涼介さん』

彼が囁く。

彼女と同じ声で。そして同じ顔で。

だが彼女よりも甘く、そして魅惑的に微笑む。

ドクン、と涼介の胸が激しく鳴り響く。

これは彼女ではない。彼女ではないのに…なぜ。胸がこんなに喚きたす？

そしてどうして、腕の中の彼をこんなに愛しいと感じるのだろうか？

彼は男だ。なのに、なぜ「好き」と言われて嬉しいと感じている？

そして何より…

好きだよ、藤原』

同じ言葉を、同じ気持ちで返している自分がいた。

目を覚ます。

ハッとして、目を開ければ、低い天井が目に入った。

そして寝苦しさに身を振れば、見慣れた自分の車の中にいる事に気付く。

徹夜明けで実習を済ませた後、アイドリングする際に狭い車内で少し

仮眠を取ったのが悪かったらしい。

夢見のまずさに涼介は身を起こし、髪を掻き混ぜる。

何故あんな夢を見たのか？

自問しながら、けれど答えは既に出ているような気がした。

否定しながらも拓海にどうしようもなく惹かれている。

それを知らしめるように、松本が所有権を主張するように、拓海の傍にいます。

一番近い場所で、彼の笑顔を向けられる。

それを見るたびに、涼介の心の奥深い場所が叫ぶ。

「カレヲ、ダレニモワタシタクナイ」と。

その感情がどこからくるのかを、涼介はいい加減察してきている。

——嫉妬。

間違いなくこの感情はそうなのだろう。

藤原拓海が好きだ、と、そう認めるのは簡単だ。

だがそうすると、二年前、彼女に感じた自分の想いが嘘だと言うことになってしまう。

一目惚れ、だった。

見た瞬間に、どうしようもなく惹かれ、そして話してみても全てを自分のものにしたいと思った。

あの時に感じた直感めいたものが間違っていたのだと思いたくない。

けれど現実には、二年前の記憶の中の彼女が薄れ、鮮やかに心の中で藤原拓海が存在が色付いている。

もしも、今日の前に拓海と、そして二年前の彼女が現れたなら。

涼介はどちらを選ぶのだろうか？

夢は深層心理を表していると言う。

ならば、夢の中で彼女だったはずの恋人が、いつの間にか拓海になっていた。

それこそが答えだ。

「…藤原が好き、か」

言葉にしてみると、その感情は思ったよりも自分にしっくりと馴染んだ。

けれど涼介は目を閉じる。

「あんたが…好きだ…」

今でも耳に蘇る拓海の告白。

けれど拓海はそれを無かったことにした。

そして傍らにいる、松本の存在。

いつだってそうだ。

大事なものは、いつもこの手をすり抜ける。

些細なミスや、そして自分のプライドのせいだ。

彼女は自分に背を向け、拓海は他の男の手を取った。

完璧な男だと、称される事の多い自分の、これが実態だ。

涼介は右手を持ち上げ、翳す。

この手は何のためにあるのだろう。

もしも。

もしも叶うなら、この手の中に拓海が降りてくることがあったのなら。

二年前のあのときのように離さず、何があろうとも手放さない。

たとえ、彼の傍にもう他の男がいたとしても。

もう自分を、好きでなかったとしても。

…煮詰まっている。

限界なほどに。

それを自覚し、涼介は翳していた手で目を覆う。

「……藤原……」

目を覆う指の隙間から涙が溢れる。

誰かを恋しくて泣くのは、二年前のあの時以来だった。

涼介の様子がおかしい。

それはプロジェクト内では公然の秘密だった。

注意力が散漫で、プラクティスに集まってもすぐに帰ってしまう事が多

い。

また体調も良くないようで、見るたびにその顔色から血の気が失せていつている。

どうしても気になり、見てはいけなそうと思いつつも涼介を窺う視線を止められない。

「涼介さんが気になる？」

その日も、色の失せた顔色で啓介に指示を出す涼介を、こっそり窺っている時だった。

背後からかけられた声に、ビクリと飛び跳ね、けれどすぐにその声の主に気付き安堵する。

「松本さん。びっくりした」

ほっと胸を撫で下ろしながら、整備を終えた油で汚れた軍手のままの松本に微笑みかける。

最近…すごい顔色が悪いんですね、涼介さん…大丈夫かな？」

他の誰にも言えない事を、松本には言える。

拓海は素直に、今の心情を松本に伝えた。

そんな拓海に、松本は軍手を外し、油汚れのない素手で拓海その柔らかな髪を撫でる。

「本当に藤原は涼介さんが好きだよな」

幾分、自嘲を込めた彼の呟きに、けれど拓海は気付かない。鮮やかな笑みで松本に隠すことの無い本心を告げる。

はい。好きです」

宣言するような声音と、その瞳の煌きに松本は瞠目する。

そして「参ったな」と自身の汚さを思い知る。

「……俺が悪役みたいに思えてきた」

もちろん松本の言葉の意味が判らない拓海はキョトンと首をかしげる。

松本さんが悪役？そんなわけじゃないじゃないですか。松本さんは優しいですよ」

本当に参る。

これでは、優しい人にならざるを得ない。

何より、彼女に軽蔑されるのが怖いから。

「藤原は学んだ方がいいな」

何をですか？」

男が優しいのは、『下心』があるからって事をね』

「……え？」

一瞬、何を言われたのかを理解できない拓海。けれどすぐにみるみるその顔が朱に染まっていく。

その反応の早さに、「おや？」と松本は眉尻を跳ね上げる。彼女の事だから、意味を理解できず不思議そうな顔をすると思っただが。

「もしかして…涼介さんにも同じような事を言われた？」

カア、と増した頬の赤みに答えを知る。

最後の最後まで、拓海に自分が「男」であるという事を刻み付けたかったのだが…とことん彼女の心は涼介に奪われている。

そしてそれは、松本にとってカケラほども望みが無い事を示していた。

ハア、と溜息を空に吐き、松本は苦笑した。

…もう、いいか。

これから彼女の一番近い存在には決してなれないが、けれど彼女の良き相談役と言っ地位は守れる。

ここらが潮時だ。

それに…。

(これ以上苛めすぎると、本当に涼介さんに殺されかねないからな)

今も、拓海と意味深な表情で会話しているのが気になるのだろう。射

殺さんばかりの目で睨みつけている。

機は熟した。

後は手を離すだけ。

藤原、こっちにおいで」

え、あ…はい」

疑わず、彼女は松本の腕に身を任せる。

そして松本は涼介に見せ付けるように拓海の肩を抱き、そして二ヤリと涼介に向かい笑う。

これで向かって来なかつたら…本当に頂くつもりで。

だが予想通り、その松本の笑みを見た瞬間、涼介の表情が強張り、手にしていたレポート用紙を啓介に投げつける姿が見えた。

視線は、こちらへと向けたまま。

ちよつと藤原に用事があるんだ。こっちへ来てくれないか」

はい」

拓海の肩を抱いたまま人気の無い場所へと足を向ける。

その背後に、涼介が付いてきていることを確認しながら。

松本に促され、連れてこられたのは資料館の裏だった。

人気もなく、また灯りもなく暗い。

ヒタリと足を止めた松本に、拓海は傍らの彼を見上げる。

松本さん、用事って、いった…」

だが言葉は最後まで続けることが出来ない。

鼻腔に感じる油の匂いと、そして逞しい腕の感触。

勘違いでなければ、拓海は松本に抱きしめられている。

今まで兄のような人だと思い、彼もまたそんな態度で接してくれた。

いきなりの出来事に困惑し、拓海は怯え、『やっ！』と叫び身しろいだ。

だが。

「シッ。黙って。俺を信じて、今は黙ってううしていてくれなやか。きつと藤原の望むことが起きるから」

小さく、囁かれた声に動きを止める。

どう言ふことか？

そう聞き返す前に、けれど拓海は強い力でその腕から引き剥がされ、そして月明かりの中で人影が松本を殴る姿を目撃する。

バシッ、と頬を打つ音に、思わず拓海は息を飲み、そして叫んだ。

松本さん！

けれど、すぐにまた拓海は息を飲むことになる。

月明かりの下。

逆行で顔の見えなかつた彼がゆつくりと拓海を振り返る。

闇夜にも鮮やかなその顔貌。

スラリとした長身が作る影が拓海へと伸び、まるで拓海の上に覆いかぶさるようにかかる。

皮肉気に、微笑むその顔を拓海は見つめた。

「……松本、か。その名を呼ぶんだな」

何が起っているのだろうか。

拓海には理解できない。

ただ。

目の前に涼介が立っている。

狂おしいほどに、熱のこもった眼差しで自分を見つめながら。

最終話

真つ暗な闇に包まれた、建物の裏――

一筋の生温い風が、3人の間を吹きぬけた。

その、一瞬の静寂。

そんな張り詰めるような空気を破つたのは、松本だった。

痛みと言うよりはむしろ、焼けるような熱に麻痺した頬を押さえる
と、その場にゆつくりと立ち上がった。

参つたな……手加減ナシですね」

そう言つて鉄の味が滲む唇を拳で拭くと、鈍く痛むそこを引き攣らせ
るようにして笑みを浮かべた。

そしてその瞬間、涼介の拓海に向けられた熱い眼差しは、一転して鋭
い眼光に変わり、松本を睨みつける。

一方、涼介の眼差しに捉えられ、金縛りに遭つたようになっていた拓海
も漸く我に返り、松本の傍に駆け寄ると、ジーンズのポケットからハン
カチを出して、血の滲んだ唇に当てた。

大丈夫ですか！？松本さん」

そして、涼介の方へ振り返ると、キッと睨み付けた。

「きなり……何をするんですか、涼介さん！松本さんが、あなたに何か
しましたか！？」

「いんだ、藤原……」

涼介に食つてかかる拓海を、松本が静止する。

拓海の瞳は、怒りに満ちていた。

自分に対する愛情などカケラも感じられない、鋭い憎しみに満ちた眼光――。

それでも涼介の本能が、絶望を超えた感情でその視線を捉える。

綺麗だ――と。

この瞳は、卑怯な事…理不尽な事を、決して赦さない。

いつだって真つ直ぐで、そんな時、己の保身などという概念は、どこかに吹っ飛んでいる。

そんな彼女に惹かれ…そして今、同じ瞳を持つ“彼”に惹かれている。

こんな純粋な魂を持つ彼に、自分は釣り合っていないのかもしれない。

だから、過去に身勝手な欲望で彼女を汚した自分は、その天罰を受けたのだ――と。そして今また、罰を受けようとしているのかもしれない

…と、涼介は思った。

それでも、この想いを止める事が出来ない。

今度こそ、自分の気持ちを偽りたくはない。

ちっぽけな自尊心や意地に逃げる事だけは、もうしたくない。

とめどなく溢れる激情が、涼介の背中を押した。

――もう、迷わない。

節くれ立った長い指が、ゆっくりと拓海の頬へと伸びた。

拓海の体がビクリと強張り、反射的に後退った背が、松本の方へと逃げる。しかし、それを許さぬ様に、頬から背に移った掌が奪うように引き寄せた。

あ…ッ！

涼介の胸の中にすっぽりと閉じ込められ、ジタバタとまがきながら助

けを求めるような視線を松本に向けると、穏やかな笑みを浮かべた松本と目が合った。

『ほら…言っただろう？ 藤原の望むことが起きるから…』

その目がそう言っている様に見えて、拓海は初めて、松本の意図に気付いたのだった。

松本さん、まさか……！

拓海がそう言うのと同時に、今まで、自身との葛藤で普段の冷静さを欠いていた涼介も、漸く気付いた。

松本…お前、最初からそのつもりで…？」

松本は困ったように微笑むと、涼介に向かって言った。

まさか…。俺はただ、藤原を俺のものにしようとしただけです。でも…振られちゃいましたけどね」

そんな…松本さん…」

泣きそうな顔を見せる拓海の頭をクシャッと撫でると、そんな顔を「するな」と笑い、すれ違いざまに涼介の耳元で呟いた。

藤原を泣かせたら…分かっていますね？」

涼介は目を閉じると、拓海を抱く腕に力を込めた。

ああ…。分かっている」

ある種の決意を滲ませて…去り行く松本の背と、腕の中の拓海に誓うように。

資料館脇のトイレで、唇に渗んだ血を洗い流そうとした松本は、自分の手に握られている何かに気が付いた。

それは、拓海の白いハンカチだった。

すでに自分の血で汚れてしまったそれを水道水で洗い流すと、腫れた

頬をそつと覆った。

この時期の水は生温く、濡れたハンカチは頬の熱を吸い取ってはくれないけれど……なぜか痛みが癒されるような気がして、松本は静かに目を閉じた。

さて、この怪我の事を誰かに問い質されたら、何と答えようかと考えながら駐車場に戻ると、そこには腕を組んだ史浩がいるだけだった。

おう……派手にやられたな。その様子じゃ、涼介は全く手加減をしなかったようだな」

まあ……無理もないか、と苦笑する史浩は、どうやら大体の事情を察しているようだ。松本も痛みを顔を引き攣らせながら笑うと、ええ……完敗です」とだけ答えた。

ワゴンに向かう史浩に、松本が疑問を投げかける。

ところで……他の皆はどうしたんです？ 啓介さんは？ 走りに行ったんですか？」

史浩はワゴンの中からタオルと冷えたミネラルウォーターを取り出すと、松本に手渡した。

ほら……これで冷やしておけよ。他の連中には、適当に理由をつけて帰ってもらったんだ。何だか、こうなりそうな予感がしていたから……。

まあ、ケンタが煩かったんで、啓介にも協力してもらおう羽目になったんだが……別に構わないだろう？」

そんな史浩の思慮深さに、松本は頭の下がる思いがした。

そうですか……」

どこかスッキリとし、満足したような面持ちの松本に、史浩が尋ねた。

松本……お前は本当に、これでよかったのか？」

その問いには答えずに、少し含み笑いをした松本は、史浩に言った。

史浩さん……あなたは本当に不思議な人だ……」

「え？」

何の事か分からずに首を傾げる史浩に、松本は笑いながら言った。

おかしいとは思わないんですか？ 俺と涼介さんが、同性の藤原を取り合っている事を……。常識的な視点から見ても、物凄く倒錯的な図であるはずなのに、あなたはそれを平然と受け入れている……何故ですか？」

自分たちの関係に、史浩は気付いている。しかし、拓海の性別の事に関してはどこまで知っているのか……この問いには、その真意を確める意味もあった。

史浩は、そう言われてみればそうだな……と首を傾げた。

何でだろう？……まあ、アイツと長年付き合っていると、心臓に毛が生えるというか……多少の事で動じなくなるのは確かだな。けど藤原の事に関しては、何と言うか、不自然じゃないというか。それが当然の成り行きのような気がしているんだ。まあ、アイツの中性的な雰囲気のこともあるんだろ？ けどさ。だから、もし涼介と藤原のキスシーンを目撃してしまったとしても、さほど不快じゃない気がするんだ。むしろ、お似合いというか……。ああ、すまない、お前も藤原の事が……」

史浩さん」

史浩の言葉を遮るように、松本は言った。

生みの母と育ての母が、子供を奪い合う話を知っていますか？」

突然松本から投げかけられた問いに、史浩は目を丸くした。

何だ？ いきなり……。アレだろ？ 育ての母の方が、腕を引っ張られて泣く子供を想って、手を離すってヤツだろ？」

……けど、それが何だっていうんだ？ と、史浩は、松本に怪訝そうな顔を向けた。

松本は、クスリと自嘲気味に笑って夜空を見上げると、こう答えた。

親子なら……そちらの方が愛情が深いという事になるんでしょね……。でも、恋愛は違う。俺は、藤原の手を離れた。もちろん、涼介さんと争うつもりは毛頭なかったですけどね……。でも、相手が泣こうが壊れようが、掻つ攫うくらいは気迫がなければ、一人の女を守り、愛し続ける事は出来ないのかも知れない。結局俺は、兄のように、親のように、藤原を見守る事しかできなかった。でも、そういう守り方も、悪くないって気付いたので……」

ぞつか……」

史浩は、感慨の籠った笑みを浮かべると、松本の背中をバシッと叩いた。飲みにくいこうぜ！今日は、俺の奢りだ。いつもの店だけだな……どうだ？」

一瞬痛みに眉間に皺を寄せた松本も、それを聞いて笑顔になった。

「いいですね……じゃあ、あの店で一番高い吟醸酒！アレを頂きますよ。いや、普段なかなか手が出ないんですがね……そういうことなら、「馳走になります」

何？ちよつ……待つ……」

顔色を変えてその場に立ち竦む史浩をよそに、松本はスタスタと歩いてゆく。

まあ……今日はしょうがないか……」

史浩は、深く溜息をつくと言った。

普段から、日本酒を顔色ひとつ変えずに黙々と飲む男だ。こんな日には、どれだけ空けられることだろう……と、内心ビクビクしながら――

――静かな夜だった。

お互いの鼓動が、聞こえそうなほどに……。

何を話せばいいのか。

何から話せばいいのか――。

おそらく頭のどこかでは解かっているのに、お互いに言葉を発する事が出来ない。

これはずっと、脳裏で描き続けていた夢……

愛しい人の、腕の中にいるということ。

愛しい人を、この腕で抱きしめているということ――。

それが現実化した今でも、まだどこか夢の狭間を彷徨っているかのように見えるのは……

この状況が、自分たちの意志のみで造られたものではなく、松本の意図によるものだったからか……。

どう……して……」

震える唇から、やっと零れ出たその言葉さえ、誰に向けられたものだったのか……。

おそらく、頭の中で渦巻いている疑問の全てに向けられたものなのだろう。そして、その答えこそ、今自分が涼介の腕の中に居る事への答えなのだろう。そう、拓海は感じていた。

俺は……バカだな……」

拓海の問いに対する答えになっていないのは解かっている。

でも、今の自分にとっては、これが精一杯の表現であり、懺悔であるように思えた。

「ここまで来るのに、随分と遠回りしたような気がする。自分の本当の気持ちに気付いたことさえ、つい最近の事だった筈なのに…。」

「こんな風に思ってしまうのは、この感情が、本当はずっと前から自分の中にあつたものだからなのだろう。」

去年の夏、峠で初めて拓海を見た、あの日から…。

松本には…悪い事をした。俺がもっと早くに自分の気持ちに素直になつていたら、あいつにこんな役回りをさせることもなかったのにな…」

「……」

それは、拓海にとつても言える事だつた。

これは、松本が自分のために描いてくれたシナリオだ。

彼の好意に甘えて全てを打ち明けてしまった事を、拓海は今後悔していた。そして、彼にこんな事までさせてしまった自分を悔いた。

藤原……」

ぴつたりと密着させていた体を離すと、スウツと互いの胸の辺りが冷えた気がした。まるで、体が名残惜しいと…離れたくないと言っているかのよう。

どうしても、お前に聞いて欲しい事があるんだ。迷惑かもしれないが…聞いてくれないか？」

その真剣で誠実な眼差しに、拓海は頬を染め、コクンと俯いた。

「場所を変えよう」

涼介の後ろに隠れるようにして駐車場に戻ると、もうそこには誰も居なかった。

拓海のはちロクだけが、暗闇にポツンと取り残されている。あれ…皆は？」

拓海は首を傾げた。FDだけならともかく、ワゴンもなければ人影も無い。それどころか、走っているような音すら聞えず、辺りは妙に静まり返っていた。

多分、史浩か松本が気を使ってくれたんだろう。おそらく、此処に残っているのは、もう俺たちだけだ。悪いが、足が無いんだ…乗せてくれないか？」

どこかぎこちない雰囲気の二人を乗せて、はちロクはゆつくりと走り出した。

隣に、涼介が居る。

今までにもこんな事は何度かあつたけど、そのいずれの状況とも違つて、2年前ともまた違つた形で…彼が今、自分の隣に居る。

そのままでいい…聞いてくれないか」

「はい」

静かに交わされる、言葉と言葉。

何かを予感させるような空気を感じながら、拓海の中で不安と期待が交錯する。

「こんな状況で言うべき事じゃないかもしれないが…藤原、俺はお前の事が好きだ。決してふざけている訳でも、からかっている訳でもない…今の、俺の正直な気持ちだ」

「……」

拓海は、何も返す事が出来なかった。

ただ、以前の様な彼に対する反発心は消えていた。

涼介の真実の言葉が痛いくらい心に沁みて、その続きを聞きたいと思

った。

でも…果たして彼は、気付いているのだろうか？

自分が女だということに。

2年前に、一度会っているという事…。

そんな事を考えていると、それに呼応するように涼介が話し出した。

藤原…俺には、2年前からずっと忘れられない人が居たんだ。

ただ一度だけ…たった一晚だけ一緒に過ごした女性だ。でも、可笑しいかもしれないが…俺はその女性の事が好きで、ずっと忘れられなかった…」

ぞう…ですか…」

平静を装ったつもりでも、ステアを握る手は汗ばみ、震えた。

一番、彼の口から聞きたくないと思っていた言葉だったから…。

でも、聞かなくてはいけない。

今、全ての事実を受け止める必要があると…拓海は思った。

俺が今まで自分の気持ちを偽ってきたのは…お前に惹かれていたという気持ちを無視し続けてきたのは、彼女の存在があったからだ。

たとえ一晚で終わってしまった関係だったとしても、俺の気持ちは変わらなかった。だから、もしお前の事を好きだと認めてしまったら、彼女への想いが嘘になってしまうように嫌だったんだ…。そして何より、彼女によく似たお前を、身代わりにするように嫌だった…」

涼介の嘘偽り無い告白が、拓海の胸に痛く突き刺さった。

そこまで涼介に想われている彼女が、羨ましいと思った。

嫉妬…してしまっただけかもしれない。

そんなに…俺に似てるんですか、その人は。どんな人だったんですか？」

ぞう…これは、嫉妬だ。

涼介に「好きだ」と言われて、素直に喜ぶべきなのかもしれない。

つい先刻までの状況を考えれば、今のこの状況は、夢のような出来事に違いなかった。

それなのに…涼介の告白を聞いただけでこんな感情が湧いてしまった自分に、拓海は、欲深い人間の醜さを感じた。

そんな気持ちを、涼介に見抜かれてしまったのだろうか。

ああ…お前の事を好きだと言っておいて、彼女の話をするのは失礼だという事は解かっているんだ。今から話す事は、言い訳に過ぎないかもしれないが、俺の懺悔だと思って聞いて欲しい。

彼女は…そうだな。男か女かという違いくらいで、本当に外見も中味もお前のような人だったよ。正義感が強くて…真つ直ぐで。無鉄砲だけど、優しくて…癒される」

自分の事を言われているワケでもないのに、何故か拓海は恥ずかしくなった。

俺…外見は分からないけど、そんな人間じゃありませんよ。似てませんよ、その人とは」

照れ隠しのように、拗ねたように唇を尖らせてそっぽを向く拓海を見て、涼介は微笑んだ。

うん。そうやって自分の事には疎い所も、ちょっと似てるかもな…」

そう言っただけ、少し遠くを見つめるような涼介の横顔が、あまりに優しくて…拓海は、何故だか切なくて…胸が痛くなった。

今度は、嫉妬などではなくて。

あの…どうして別れちゃったんですか？たとえ一晚でも、恋人同士だったんでしょう？…啓介さんから聞きました」

啓介がそんな事を…？それは違うな。確かに、俺の中では恋人だった。でも、名前も知らなければ、どこから来たのかも知らない。

我ながら、馬鹿だったと思うよ。よっぽど余裕がなかったんだ…。そして、その日別れたとしても、また必ず会えるところかで過信していたんだ…。結局、それっきりさ」

そう言っただけで自嘲笑味に笑う涼介が、今までのイメージと違って、とても人間臭く思えた。完璧なのに…隙だらけ。それが今、自分の前だけで晒されている姿だと思つと、優越感すら覚えた。

会えな…かったんですか…。涼介さんは、自分の連絡先とか教えなかったんですか？ たとえ一晩でも、彼女も好感を持っていたなら、連絡くらい寄こすはずでしょ？」

我ながら大胆な質問だな、と思つた。でも、仮にも今は自分の事が好きだと言つたら、聞く権利はあるよな…と、心の中で言い聞かせる。

涼介も、この事に関しては隠すつもりもない。もとより、全てを拓海に話した上で、今の自分の気持ちを伝えるつもりだった。

一呼吸おいて、涼介は話し始めた。

勿論、俺の連絡先を書いたメモは残したんだ…ああ、彼女は…眠っていたから。とても気持ちよさそうに眠っていたので、起こすのが可哀想だな。俺は、史浩から二軍の連中が騒ぎを起こしたという連絡をもらつて、チームリーダーという立場上、すぐに行かなければならなかったんだ。でも、彼女は俺が走り屋だということも知らなかったし、いきなりそんな場所に連れて行くのも気が引けた。だから、帰りの交通費と連絡先を書いたメモをベッドサイドに残して部屋を出たんだ…」

その話を聞いた瞬間、拓海の脳裏に何か引掛かるものがあった。

しかし、それが何なのかは解からなかった…。

でも、目が覚めたら相手がいないくて、いきなり枕元に金があったら、避ばれた』とか思っんじゃないですかね…」

そう言つた自分に、吃驚した。

紛れも無くそれは、過去の自分が体験した事だった。そして、その相手は、この涼介…。

拓海の頭の中で、先程感じた何かが、一本に繋がった。

あの時のあの金が、涼介の言つた交通費だったとしたら…？

破り捨てたメモに、実は続きがあったとしたら？

もしかして、金だけを見て勘違いし、逆上した自分は、メモをきちんと最後まで見なかったのではないだろうか？

だと、したら…？

拓海は、目を見開いて固まった。そして、それと同じ状態が、隣に座っている涼介にも起つていた。

ぞう…か。それは考えなかったな…。その辺の女だったら、何の疑問も持たずにその金を使ってタクシーにでも乗るんだろうが、彼女は、食事代すら男が払うものだという事を知らなかったんだ。

まあでも…とても言いづらい事なんだが、彼女はまだ高校生だったんだ。持ち合わせも少なそうだったし、彼女の家が何処かも解からなかったから、すこし多目に金を置いたんだが…しかし、お前の言つとおりだったとしたら、ものすごく不愉快な思いをさせたのかもしれないな。もしかしたらメモに気付かなかったのかも、と思つていたんだが、連絡がこなかったのも当たり前か…。俺が、浅はかだったんだな…」

涼介が、そう言い終わるか終わらないかのうちに、急に体が前のめりに引張られた。

拓海が、急ブレーキをかけたのだ。

どうしたんだ、藤わ……ら？」

大きく見開かれた瞳が、事が尋常ではない事を物語っていた。

涼介さん……」

そう言う拓海の声も体も、震えている。

その高校生が……不良に絡まれている所を、助けたんじゃないかもしれませんが……」

ぞう……だが……なぜそれを？」

その質問には答えずに、ステアリングに頭を打ち付けるようにして、

拓海は顔を埋めた。

ふ……く……は……っ……」

拓海は、笑っていた。

それと同時に、泣いてもいた……

色んな思いが同時に込み上げてきて、もう、どうしたらよいのか分からなくなっていた。

でも……それだけで、十分だった。

拓海の様子を見ただけで、涼介には全て理解できた。

お前……だったのか……」

そして、そっと拓海の肩を抱くと、『ごめん……』と呟いた。

俺が……馬鹿だった。お前の気持ちも知らずに、ずっと辛い想いをさせていたんだな……。こんなに近くにいたのに……目の前に、いたのにな……」

ずっと頭を優しく撫でられながらも、拓海は嗚咽が止まらなかった。

オ……しも……っ、ずっと勘違い……し、てて……っ……ごめん、な……」

もう……何も言わなくていい」

そう言うのと同時に、涼介は拓海の唇を塞いだ。

擦れ違い続けた二年間を埋めるかのように、幾度も……

浅く、深く繰り返される口付け……

求め合う、心とカラダ……

それは、たった一夜に降った媚薬が見せた――

――真夏の夜の、夢――

――完。――



…言い訳のしようもなく…。

アホ4コマですみません。

そして次ページからの番外編には

大人表現

があります。

肉体的にも精神的にも相応しくないと
思いの方はどうぞページを閉じて下さい
ませ。

何の、身も心も立派な大人です！

そんな方は安心してページを開いて下さ
いませ。

それでは、私なりの二人のその後。

…クレームは受け付けません。

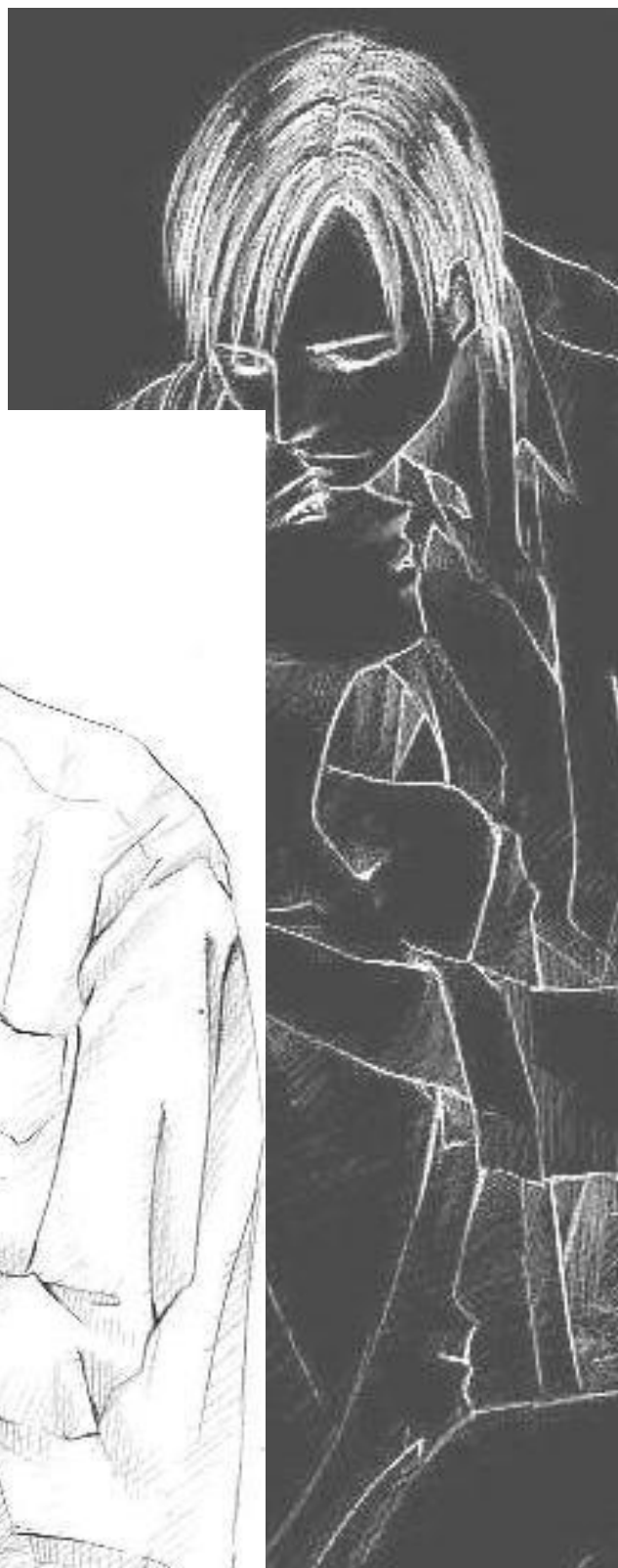
あらかじめ宣言しておきます。

…す、すみませんでした！

BOSS-PAN なんや



～番外夜話～



人を好きになる。

それがどんな事か、涼介は彼女に出会うまで知らなかった。

むしろ二年前。

幼い頃から恋慕の情に晒される事の多かった涼介にとって、恋に溺れる輩を軽蔑の対象でさえあった。

好きだから』

と言いつ身勝手な言い訳を大義名分にし、己の感情を押し付けようとする傲慢さ。

それに言いようも無いほどの嫌悪感を持っていた。

そしてそんな感情を嘲るように、ただ身体を繋げるだけの関係を繰り返した。

自分に夢中になる相手を翻弄し、溺れる様を観察し嘲笑う。

そんな自分が恋を知った。

激しく、辛く、切ない恋を。

彼女を一目見た時に、例えばようなない引力を感じ、目が離せなかった。

そして一度それに触れると、溺れずにはいられない。

かつて、自身が嘲笑った女たちのように夢中になり、余裕なく、後先も考えずに身体を繋げて…そして失った。

これは今までの自分のした仕打ちへのしつぺ返し。

彼女たちにしていたことが、自分にされただけのこと。

涼介は深く反省した。

未練がましく、彼女をずっと求め探し続けたが見つからず、かと言って

他の女と遊ぶような不誠実な真似を繰り返す気には一切ならず、前から好きだった車にのめりこみ、バトルに集中している間だけは彼女の事を忘れられた。

そして彼女を失い一年が経ち…『彼』に出会った。

柔らかく、優しい見かけとは違い、鳥肌が立つようなキレた才能。

そのギャップだけでなく、性格も素直で、頑固なところはあるが意固地では無い。

彼が、彼女の見かけに似ていたと言っただけではない。

その中身、持つ才能全てに惹かれた。どうしようもなく。

そして否定を繰り返しながらも、涼介は『彼』に恋している自分に気付くのに一年の歳月を必要とした。

忘れられない初恋も。

傷を抱えながら認めたこの恋も。

どちらも同じ相手だったのだと知ったこの感動は例えようも無い。

何度キスを交わしても足りない。

ずっと飢えていた心と身体が、もっと深い場所で彼女を欲しがっている。

肩を抱いていた手が、滑らかなラインを描く腰へと移り、シャツの裾から素肌を味わおうともぐりこむ。

夏と言っ気温のせいで汗ばんだ肌。それが手のひらにしつとりと馴染み、涼介の脊髄を刺激する。

「……藤原……」

呼吸が荒くなる。

唇を離し、うっすら汗の匂いを嗅ぐわせる首筋に移り、ラインを確かめるようになぞった。

「……っ……」

ビクリと、拓海の身体が跳ねた。

涼介は二年前のたった一度だけのあの夜を思い出す。

あの時も、ガチガチに緊張していた拓海は、首筋を唇でなぞると身体を跳ねさせた。

そして。

「……固くなってる」

クス、と忍び笑いを浮かべながら、裾から潜り込ませた手でふつくらとした隆起を見せる柔らかな固まりを包み、指でその先端を摘む。そこはしこり、固くなっている。

二年前もそうだった。

何も知らない体だったのに、キスを繰り返し肌の上を唇でなぞると、ここは固くなり初心だけではいらない事を涼介に教えてくれた。

囁くと、拓海は悔しそうに唇を噛んだ。それも、二年前と同じ。

「だ、ため……」

さらに手のひらが下方に潜る。

ジーンズのボタンを外しその下の布地の中へと滑り込む。

淡い茂みを越え、かつて潜り込んだ事のある深い内部の入り口へと指を滑らせる。

そして涼介は驚きに目を見張った。

二年前。

何もかもが初めてだった彼女のそこは、いつまでも固く狭かった。けれど今は……。

「……濡れてる？」

しつとりと濡れ、涼介の指を誘い込むように吸い付いてくる。

その瞬間、閃いた考えに、涼介は溜まる生唾を飲み込んだ。

真っ赤になった顔を背け、羞恥に小刻みに身体を震わせる拓海。

その恥じらいの理由が、慣れない行為をしていると言っただけではなく……。

「藤原……もしかして……あれから自分で弄ったり……した？」

肯定して欲しい気持ちと、否定して欲しい気持ちが入り混じっていた。

否定されたら、失望の気持ちはある。

けれど、肯定されたら……狂いそうだ。

そして答えは、一際強くビクツと跳ねた体と、怯えたような拓海表情が答えてくれた。

「俺の指を思い出して……ここをこんな風にしたり……」

強く、胸を揉んだ。力の加減が出来なかった。

呼吸は今にも倒れそうなほどに荒く、そして指先は興奮しすぎて微かに震えていた。

「ここにも……入れたり、した？」

ぐるりと、濡れたそこを掻き回す。淫猥な水音が清楚だと思っていたそこから響き、涼介の耳まで届く。

拓海の体の震えは激しくなる。

顔を背け、涼介の手を拒み身を振らせる。

歓喜に胸が躍るが、恋する人間の愚かしさで同時に不安も浮かぶ。

それとも……誰か他の人間が触った……？」

二年だ。

自分は忘れられず身綺麗にしていたが、自分の無神経な行動に怒り、傷付いた彼女がずっと自分を思っていたとも限らない。

あれから誰か、他の人間に抱かれたのかも知れない。

そんな不安が過ぎり、涼介を怖れと嫉妬に包んだ。

けれどそう言った途端、逸らされていた拓海の視線が戻る。

怒りを称えた眼差しで涼介を睨み、そして硬く握り締めた拳が涼介の

頬を打った。

ガツン、と火花が鼻の奥で散る。

そしてクラクラする頭で拓海を見ると、彼女の瞳からはボロボロと涙が溢れていた。

「俺は……あんたとは違う……ずっと……涼介さんだけ……なのに……」

車の中で良かった、と涼介はしみじみ思った。

ここが車内で。

ステアリングを握るのは拓海で。

そしてこれは拓海のハチロクの中だ。

もしもこれが涼介のFCだったら……きっと拓海は場所も考えずに飛び出して行っただろう。

自分は運が良い。そう涼介は思った。そしてそれを離さず、掴み取る。

「俺とは違っつて……何だ。」

確かに俺はお前と出会う前はロクな事はしてなかったが、お前と出会うてからはお前の事だけ思っってきた。二年前にお前を抱いてから……お前としかセックスしてねえよ」

「……嘘」

信じられないと言いたげに涼介を凝視する拓海。

その表情に、喰らい尽くしたいと言っ欲望が爆発しそうになる。

拓海の手を取り、はち切れそうな欲望に触れさせる。

見栄も、外聞もかなぐり捨てる。

必死にならなければ、これは手に入らない。態の良いごまかしのないむき出しの自分を見せる。

「ここはお前にしか熱くならない。あの時のお前の感触を思い出して……俺は自分でしてたよ。お前が恋しくて」

体言するように、拓海の指の上から自身を刺激する。

彼女の指が触れている。それだけで爆発しそうなほどに快感を覚えた。

「……っ……」

戸惑い、けれどどこか欲情に濡れ潤んだ瞳の拓海が涼介を見上げる。変化するそこに触れる指が、確かな意図を持って動き始める。

「俺……も……」

何度も、ピンク色の舌が舐めたように唇をなぞる。その扇情的な仕草に、涼介の欲望はまた膨れる。

「して、た……涼介さん、思い出して……」

覚悟していたとは言え、心臓が止まりそうなほどの衝撃を受ける。

カア、と脊髄から昇った熱は脳内を沸騰させ、全身に激しい業火のような熱を放つ。

だって……見ちゃうと、ダメだ……思い出すよ……あんたが……俺にしたこと……」

拓海の震える指が、涼介のシャツを掴む。

あんたに会ったび……苦しくて……悲しくて……なのに体ばかり熱くなつて……そんな自分嫌なのに……一回夢で見ちゃったら……と、止まらなくなつて……」

限界、だった。

有無を言わず、運転席から拓海を引きずりだし、ナビシートのリクライニングを倒し組み敷いた。

狭い車内の中、自分にも、彼女にももちろん不都合はあった。

ぶつかり膝や足が痛む。

けれどそんな事に構っていられなかった。

焦る手つきで、ベルトのバックルを外し、ファスナーを下ろし局部だけをむき出しにする。

目の前の彼女の表情が、怯えたものになった。

涼介の呼吸は荒い。

まるで自分が飢えた獣の顔をしている自覚は十分あった。けれど。

「……欲しい……お前が」

止まらない。

拓海のジーンズを下着ごと引きずり下ろし、片足だけ抜いたところで放置する。

我慢……出来ないんだ……」

情けない。

拓海だけだ。

こんなに余裕が無くなるのは。

本当ならもっとゆっくり、穏やかな場所で愛を確かめあいたかった。

全身を味わいつくし、そしてそれから彼女を自分のものにしたかった。

それがどうだ。

こんな局部だけを曝け出した状態で、そして碌な愛撫もなく挿入しようとしている。

「すまない……藤原……」

足を抱え、腰を突き入れる。

自身の欲望のままに。

拓海の事など、気遣えなかった。

とにかく彼女に内に入りたくて。

彼女に包み込まれて。

彼女の内側を自分の剥き出しの欲望で擦り上げたかった。

「っ、あぁ……」

先端でこじ開けるように入り込み、そして躊躇なく奥まで突き刺し

た。

多少濡れているとは言え、慣れていないそこは狭い。

柔らかく、けれどきつく締め付けるその感触は、涼介に快樂をもたらさなかった。

痛みさえ感じる。

だが……心が堪らない愉悅を味わっている。

二年だ。

二年、ずっとこれを求めてきた。

欲しくて欲しくて、気が狂いそうになった時もある。

夢など数え切れないほどに見た。

どんどん鮮烈だった記憶が消え、うつすらとした思い出になろうとするのが許せなかった。

けれど記憶は退化する。

ふと、彼女への想いはただの自分の意地だったのではないかと錯覚する時があった。

あの時のシヨックが、ただ緒を引いているだけだと。

けれど実際にこうして手に入れてみれば、そうではないことをまざまざと知る。

「好きだ……」

言葉が出てこない。

感極まって、胸が震える。

ポタリと拓海の胸の上に水の粒が落ちた事で、自分が泣いていることを知った。

涼介の泣き顔に、苦しそうだっただけの表情が変わる。

宗教画の聖母のように自分を包み、揺ぎ無い愛情を称えた慈しみの眼差し。

強張っていた体の力が抜け、いたずらに彷徨っていた両腕が涼介の背中に回り抱きしめる。

「……好き……涼介さん……」

万感を込めた呟きだった。

人を好きになる。

恋に焦がれ溺れる。

そして、人を愛する。

それがどんなものかを、漸く涼介は手に入れた。

まだ夜も明け切らぬ早朝。

拓海は目が覚めた。

毎朝、豆腐の配達のため早朝に目覚める習慣のある拓海の朝は早い。

ぼんやりとする頭を抱え、枕元に置いた携帯で現在の時間を確認しようとした手が、暖かいものに触れる。

驚き、パチリと眼を見開いた拓海の視界に、夢で何度も見た人の姿があった。

薄暗い室内でも、その容貌の端整さは見て取れる。

怜悧な光を称える眼差しが今はしっかりと閉じられ、そして規則正しい呼吸音がしていた。

「……涼介さん……寝てる」

寝顔を見るのは当然だが初めてだ。

二年前のあの時はもちろん、あれからもずっと。

ふんわり、幸せになりかけた気持ちはいけれど長くは続かなかった。

ブルリと、寒さを感じ震えた瞬間に自身の今の姿を自覚する。

裸だ。

何で？と疑問に思うと同時に、蘇ったのは昨晚の記憶。

誤解が消え、想いが通じ合い、そしてキスを交わし、そのまま車内で……。

カアア、と全身が羞恥で真っ赤に染まる。

昨日はあれから一回だけに留まらなかった。

性急に車内で求め合った後、涼介に高崎の自宅へ連れて行かれた。

そしてシャワーを浴びたいと言いつ拓海の要望を聞き入れてもらえず、

部屋に入るなり彼のベッドに押し倒され……文字通り全身を味わい尽くされた。

二年ぶりの彼との性交は最初痛みしか与えなかった。

けれどこの部屋で涼介は拓海をドロドロに溶かし、そして……変えた。

身動きすればまだ彼が内に入っているような感覚がある。

あの時に感じた、ジンジンとする感触も、また……。

や、あ……涼介さん……やだ……

『嫌？』

変……おかしい、俺……溶ける……

『……感じて……るのか？』

感じて……何……？』

ああ、拓海……』

やあ、動か……うん、あ……』

自分が出したとは信じたくない、甘ったるい声。

そして最後には、涼介の動きに合わせて自分の腰が揺れていた。

そんな拓海に涼介は何度も「好きだ」「愛している」と嬉しそうに微笑み囁き、そして……。

最後には頭が真っ白になった。

奥手で鈍感な拓海だって、エクスタシーと言うものがあることくらい知っている。

それが、たぶん…あれなのだろうと思う。

チラリと、傍らに眠る涼介の寝顔を見る。

欲望とは無縁そうな顔をしているのに、ものすごくいやしかった。

あれが大人の男なのだと言われたら、自分の周りの男全員に怯えてしまっくらいに。

でも、何故だろう。

あんなに恥ずかしくて、冷静な彼を獣のように変えてしまっ行為だと言っのに、今の拓海の胸の中には幸福感しかない。

嬉しくて。ほんの少し恥ずかしくて。

そして何より、目の前の彼が前よりももっと大好きになっている。

そつと目の前の涼介の整った鼻筋を指でなぞる。

ずつと夢見て、恋焦がれた存在。

それが今は自分のものになった。

この唇が自分に触れ、そして指が全身をなぞった。

思い出すだけで、静まったはずの熱が再燃しそつだ。

ぶるりと頭を振り、拓海は身を起しベッドから降りた。

足が萎え、腰がガクガクする。体はベタベタで昨晚の名残を嫌と言うほど残している。

へたりこみそつな腰を抱え、床の上に散らばつた服を身に纏おうとするが、拓海は自分のシャツではなく涼介のシャツを取り身に纏つた。

ベタベタしているから大きなものの方が気持ち悪くないから、とか。

色んな理由を自分に付けて。

けれど本音は自覚している。

……彼を感じたかつたのだ、こんな些細な事でも。

肩幅が広く、男に間違われる体格ではあるが、涼介の体格は拓海よりも大きい。

それは見て知っていたが、実際に同じシャツを身に纏うとそれは顕著だった。

肩がずり落ち、ボタンをしつかり留めても胸が見えそつになる。

下はさすがに彼のものを見につけるのは躊躇い、自分のジーンズを履き階下へ降りバスルームに向かう。

勝手にバスルームを使用するのは躊躇われたが、ずつとこつしていると一人でまたモヤモヤとしてしまっそつだった。

頭から熱い湯をかぶり、昨日の名残を消し去るよつにボディソープで洗い流す。

さつぱりとした気分と体でまた涼介のシャツを身に纏い、髪のをバスタオルで拭きながら涼介の部屋へ戻ろうとする拓海の前に、けれど人影が現れた。

ふ、と顔を上げると、目の前には背の高い人物。

一瞬、涼介が起きたのだろうかと思つたが、違っ事はその人が発した声で分かつた。

「お前…藤原？」

同じ体格ではあるが、身に纏う雰囲気は正反対と言っても過言ではない。彼の弟の啓介だ。

今、帰宅したばかりなのだろう。

眠そつだった顔が驚きに強張り、拓海を凝視している。

「……啓介さん」

同じく拓海も驚いていた。

そしてまるで悪戯が見つかつた子供のような気分ではつが悪く、視線を逸らす。

啓介は目の前の拓海を上から下までまじまじと見下ろし、そして頬を赤らめ気まずそうに視線を外した。

「そーいやガレージにハチロクがあつたよな……いや、それよりもお前……」

あの……」

いつもハッキリと物事を言う啓介には珍しく、やけに言い淀んでいる。

それがやけに拓海を焦らせた。

「あゝ……アニキも一緒？」

は、はあ。まだ……寝てますけど……」

「そつか。あゝ……なるほど」

な、なるほどって、あの……」

「いや……ワケ分かんなかったのが、一本に繋がった感じ」

え？」

啓介の視線が再び拓海に向けられる。

けれど、啓介は頬を赤くし口元に手を当てまた目を逸らした。

「つまり、アニキの二年前の相手って……お前なんだろう？」

何でそれ……」

驚き、目を見開く拓海に啓介の溜息が聞こえた。

「二年前、アニキはまだ高校生だつて女に惚れた。そいつは藤原に似てるんで、最近のアニキは拳動不審で、うちにいる今日のお前。そんだけ揃えば、何となく答えは見えるっつーの」

見えるって……何が？」

ハアと、啓介は溜息を再度吐き、そして拓海の肩を指で突いた。

「白いシャツをノーブラで着れば胸どころか乳首まで丸分かりだろうが。」

しかもお前、それアニキのシャツだろう？んな、いかにも彼氏のシャツで

す、なんてスタイルで、さらに首いっぱいにキスマーク。それだけでも厄介なのにお前……」

啓介の言葉に、拓海は真つ赤になり胸と首を手で隠した。

失念していた。拓海の日常に、そんなものを隠す修正は無い。

ノーブラはいつもだし、けれど確かに白は避け、厚手の濃い色地の服ばかりを選んでしたのは事実だ。

「お前さあ、気付いてねえだろうけど、すげえやりまくってたって感じでウルウルしてんぜ？」

何かさあ、全身から色気垂れ流してる感じ。……マジやべえよ」

う、うるうるって……」

やりまくる……そんな分かるのだろうか？

恥ずかしすぎて死にそうだった。

「しかも天然……アニキも大変だ、こりゃ」

シヨックで卒倒しそうだった。

しかしふらつき、本当に倒れそうになった拓海を正気に戻したのは、バタンと言つ激しく扉を開く音と、慌しい足音によつてだった。

拓海……」

激しい足音と叫び声。

それが誰のものか、瞬時に啓介と拓海は覺つた。

アニキ？」

涼介さん？」

名前を呟くと同時に、駆け下りてきた人物に勢い良く抱きしめられる。

痛いほどの力。

首筋に彼の髪が当たり、頬にハアと安堵の溜息を吐く涼介の呼吸を感じた。

「……驚かせるなよ。ベッドにいないからまたどこかに行っちゃったのか
と思った…」

心底、焦った様子の涼介に、きゅん、と拓海の胸が疼いた。
下だけを着て、上半身は裸のままの涼介の背中に腕を回し抱きしめ
る。

「すみません。シャワー…浴びたかったです」

だった俺を起こせ。また逃げられちゃったかと思っただぜ…」

強く抱きしめる腕が、過去に感じた涼介の悲しみを体言している。

拓海もまた同じ強さで抱きしめ返した。

「すみません」

じわ、と揺ぎ無い幸せを胸に感じる。

目覚めて、まだどこに残っていた不安のカケラが消えていく。

その腕の中で。熱ささえ感じる体温に包まれ、うっとり目を閉じか
けた拓海の意識を戻したのは、しかし第三者の声によってだった。

「あゝ…う、ウン…」

わざとらしい咳払い。

それで漸く拓海は思い出す。

自分たちの他に、啓介がいたことに。

涼介の視線もまた、拓海と同じように啓介を見ていた。

だがその眼差しは、拓海とは違い冷えて凍りつきそうなほどに…厳し
い。

「啓介…いたのか…」

「…いましたよ」

ガリガリと頭を掻きながら溜息と共に啓介が答えた。

「まあ…なんつーか、アニキ。おめでとつ」

その啓介の言葉に、涼介の眼差しが和らぐ。

ああ。ありがとう」

「……そんで、俺…もしかしくなくても、邪魔？」

邪魔だな」

…そんなハッキリと。

そう感じてしまったのは拓海だけらしく、涼介は当然と言いたげに、
そして啓介は「やっぱりな」とまた溜息を吐いた。

「ハイハイ、出ていきますよ。藤原の喘ぎ声なんて聞かされて、煽ら
れてもたまんねえし」

あ、あえ…」

カア、と全身が朱色に染まる。

誰が聞かせるかよ、勿体ない」

しないと言っ選択肢はないのか…。

つまりは暗に、するって事？

そう考え、さっぱりさせたはずの体に、また熱が点る。それを拓海は
首を振って振り払おうとした。

「ま、二年越しのアニキの恋煩いが治ったのに免じて出てくよ。

それよりアニキさあ…これから大変だぜ？」

「何がだ？」

「わりあえずバトルの前はH禁止な」

「………は？」

こう答えたのは拓海だ。思いがけない言葉に、目を見開き驚愕する。

涼介は眉間に皺を寄せ、不機嫌そうに啓介を見返した。

何故？」

「…んなの、今の藤原を見りや分かんたろうが！そんな色気垂れ流しも
状態で峠に連れてって…アニキ、マジで平気なのかよ？」

そして涼介はそこで初めて、腕の中の拓海の姿を見返した。

驚きに目を見開き、そして悔しそうに歯噛みする。

「……よく分かった。善処する」

そして歯噛みしていた涼介が、何かに気付いたようにハッと顔を上げ啓介を見た。

「お前……見たな……」

そう睨むと同時に、啓介が駆け足で逃げ出し、そして後には玄関の扉が閉まる音だけが響いた。

しん、としてしまった室内で、拓海はぐるぐるとずっと啓介に言われた事を考えていた。

うるうる。

色気垂れ流し。

やりまくった。

喘ぎ声。

全部、一昨日の自分には無縁だった言葉だ。

……そんなに分かるのだろうか？

不安になり、涼介を見上げると、彼が厳しい眼差しで拓海を見つめていた。

「……危険だな」

「え？」

拓海がだよ。

……いいか。峠では絶対に一人にはなるなよ。俺か……啓介……は仕方ないな。史裕も……まだ良い。それ以外とは絶対に二人きりにはなるな」

二人きりになるなと言つても……

「松本さんは？」

メカニクの松本とは二人になる機会が多い。

何気なくそう問うと、涼介の額にくつきりと青筋が浮かんだ。

「……松本……か……」

峠では松本さんと一緒の時多いですし……」

その答えに、涼介の青筋が増える。

駄目だ！

「……え？」

松本と一緒にいる時には、俺も必ず同席する。いいな。あいつとは絶対に二人きりになるなよ」

何だか腹が立つてきた。

「……もしかして涼介さん……松本さんが俺に何かするなんて疑ってるんですか？ あれは松本さんが俺の為にわざわざ居してくれただけですよ？！ それなのに疑うなんて……酷すぎます！」

むしろ、今二人がこうしていられるのも松本が力になってくれたからだ。拓海にとって松本は頼れる兄のような存在。それなのにそんな言いがかりをつけるのは松本にとって失礼だと思つた。

拓海の激昂に、涼介は戸惑つたように何かを言いかけたが、口を閉じ、拓海には聞「ええなくらいの小さな声で呟いた。

「……男が下心無しで女の為に何かするかよ……クソ、鈍い……けど……」

そこに惚れているのだ。

「ごめん」

素直な涼介の謝罪に、拓海の怒りが消え戸惑いが生まれる。

「え、あの……」

拓海が心配なんだ。誰かに取られてしまわないかと」

「俺なんて誰も欲しがりませんよ」

そんな事ないだろう？ 実際、ここにいないじゃないか」

何というか。

拓海は頬を染め俯いた。

二年前からそう。何故この人はこうも恥ずかしいセリフを言えるのだろうか。しかも絶世の美女とかではなく、拓海を相手に。

拓海が好きだから心配になる。

一度失つてから…まだどこかへ行ってしまうのを恐がってしまうんだ。分かってくれ」

真摯な涼介の言葉に、拓海は彼の胸に頬を寄せた。

心臓がドクドクと鳴っている。少しでも早く刻む鼓動。

それを聞きながら拓海は目を閉じた。

お前が女だつて事実はいくらも隠すからな」

「……はい」

誰かに妙なことをされたら、俺にすぐに言え」

「はい」

暑くても肌の露出は厳禁だ。…俺の前で以外は」

「……」

特に、こんな格好は絶対に他の男の前で見せるなよ。お前は俺のモンなんだから。俺には独占する権利がある」

「……」

本当に。

この人は自分の事が好きなんだなあ、と拓海は実感する。

ほんの少しだけ行き過ぎかと思うけど、それが面映くて心地好い。

だから彼にも同じ気持ちになつて欲しかった。

聞いているのか？ たく……」

言いかけた唇を塞ぐ。

拙い動きで舌を彼の唇の中に潜り込ませると、彼の舌先がピクリと震えた。

伝えなかった。

自分も、彼が大好きなのだと。

唇を離し、首筋にされたようにキスマークを付ける。

やり方は何となくでしか分からなかったが、無事に赤い跡が残った。

満足げに頷き、涼介を見上げると果然と固まる彼の顔があつた。

聞いているし、分かってます。俺が涼介さんのモンだつてこと」

指で、出来上がったばかりの赤い跡をなぞる。

でも…涼介さんも俺のモンだから。俺にだって涼介さんを独占する権利はあるんですからね。他の人に優しくとかしたら駄目ですよ」

これは自分のもの。

もう絶対に誰にも遠慮しない。

過去、見えない恋人の存在に涙し、そして引き下がったけれど、今は絶対に譲らない。

力づくでも奪い取って見せる。

笑顔見せんのも嫌だし…話すのも嫌。…けど、そんなこと言つてたら何もできなくなるだろうし、仕方ないから我慢します」

本当はギャラリーに来る女たち全てに嫉妬していた。

甲高い声で、涼介の名を呼ぶ女たちに。

そしてさらに言うなら、彼の過去の女と言うものにも嫉妬してる。

自分に出会う前の事だからと言ひ聞かせても、悔しくなる心はあるのだ。

ぎゅう、と彼の体を抱きしめ、その胸に額を擦り付ける。

匂い。感触。熱。

それを感じ、また想いは深まる。

「あんたは俺のモンなんですから！」

ああ、悔しい。

ああ、悔しい。

ああ、悔しい。

ああ、悔しい。

ああ、悔しい。

この人の人生全てが、自分のものにならないこと。
過去はもう仕方がない。

けれど未来だけは誰にも奪われたくない。
分かってます?」

何の反応も無い涼介が不満で、見上げて問うと、真っ赤な顔の彼がいた。

何だか陶然としていた表情は、拓海と目が合った瞬間に、大輪の薔薇が花開くように綻んでいく。

にっこりと。

鮮やかな笑顔を見せ、そして少年のような声を上げ笑った。

拓海!」

うわっ!」

いきなり、ふわりと足元を掬われ、気がついた時には涼介の腕に抱きかかえられていた。

それが『お姫様抱っこ』と呼ばれる類のものであると気付いたのは、そのままの体勢で移動された時だ。

ちよ…涼介さん、どこに?」

聞かなくても、彼の足は階段を昇り、彼の部屋へと向かっているのは分かる。

ドクドクと、心臓がまた高鳴りだす。

俺は拓海のモンなんだろ?」

笑顔一つで、下腹部に熱が溜まる。

浅ましい。

恥ずかしい。

けれど。

それをじっくり、証明してやろうかと思って」

部屋の扉を蹴り開け、ベッドの上に降ろされる。

扉を閉めた彼がすぐに覆いかぶさってくる。

涼介の指が、まるで壊れ物のように拓海の頬を撫でる。

目は、この上も無く美しい物を眺めるように、慈しむように、たっぷりの愛情を称えている。

「…愛してるよ」

囁きには、真心が込められていた。

恋をした。

一生に一度の、とても深い恋。

誤解が二人を引き裂いても、どんなに否定しようとも、忘れようとしても無駄だった。

今、それは自分の手の中にある。

拓海は涼介と同じ表情を浮かべ、そして覆いかぶさる彼の体に腕を回した。

「大好き」

そう耳元に囁くと、拓海の最初で最後の恋人はこの上も無く幸せそうに微笑んだ。



—後記—
Side:NANYA

事の始まりはもう一年以上も前になります。
ずっと胸に抱いていた野望…くじらさんとのリ
レー小説、図々しくも日記なんぞで告白してみ
たら、思いもかけずにくじらさんの快諾。

「棚からボタモチ」

そんな言葉とともに始まった連載ではありまし
た。

期しくも、時期が二人の一周年と近かったこと
もあり、

「一周年記念にやっちゃおうぜ？」

みたいな。

リレー小説と言う形式は全くの初めてのこと
で、徒手空拳のまま進んで、くじらさんにも色々
ご足労をおかけしましたが、今回本という形を
取ることが出来て本当に幸せです。

そしてずっと応援してくださった皆々様に大感
謝。

少しでもその感謝の気持ちが、この本によって
伝えられたらと思いますよ。

最後までお付き合い下さりどうもありがとうご
ざいました。

それではまたオンラインの世界で。

BOSS-PAN なんや

—後記—

Side:KUJIRA

このお話を頂いた時は、すっごく嬉しかった事を覚えています。…と同時に、『私でいいのか！？』と。

嬉しいお誘いに二つ返事でOKしたものの、実際に書き始めたらすごいプレッシャーで…。いや、お受けする前にも一応悩んだのですよ。なぜなら、なんやさんの鬼のような執筆の速さを知っていましたから！ドン亀の筆の遅さの私が、足を引っ張るのは目に見えていたワケで…。実際、その通りになってしまった事を、ここにお詫び申し上げます。

「リレー小説」というのは、もちろん初めての体験でしたが…難しいですね！

相方の創った世界観を受け継いで、それを壊さないように作文するのは、思ったより難しい作業でした。キャラ設定もしかり。作中で「おや？」と違和感を覚えたら、それは私の力不足です。ごめんなさい。

すべてなんやさん任せで、大変ご迷惑もお掛けしましたが、こうして形として残していただけた事、心より感謝申し上げます。

ありがとう、相棒よ…。

そして、最後まで読んで下さった方、この本を手にとって下さった方々にも、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

Azurewhale くじら

